哲学研究　第五百七号　第四十四巻　第一冊

ホワイトヘッド『過程と実在』への序説（未完）

ジョン・D・ゴヒン
野田又夫訳

序

ホワイトヘッドが形而上学を考えた主な時期は、かれがハーヴァード大学の哲学教授に任ぜられた一九二四年から始まると考えてよいであろう。その時かれは六十三才であったが、精神は力強く身体は健康であった。かれは一九三六―七の学年の第二学期の終りまで講義を続けた。引退した時七十六才であった。最後の年の講義では、健康勝れず、時々休講した。しかしながらこの時もかれはその最もすぐれた特色をしばしば発揮した。かれの警句を吐く才能、かれの機智、かれの創意、および考えを心に浮ぶままに表現するかれの能力は、最後まで衰えを見せなかった。

ホワイトヘッドは大雑把な覚書をもとに講義した。講義中たびたび考えを模索し躊躇するときがあった。また考えがすらすら流れ出て来るときもあった。更にはホワイトヘッドが霊感を受けているように見えるときもあった。このような瞬間には、かれは思想の宏大な展望を暗示し、実際に口にした言葉を遙かに越える言外の意味を暗示すること

が出来た。学生達は、ホワイトヘッドの哲学的見解に全く反対の信念を持っている者でさえも、ホワイトヘッドのこの異常な力を認めたのである。

ホワイトヘッドは講義中、最も一般的な抽象概念と具体的なものとの間を動きまわった。経験や芸術や歴史や諸科学についての細かい観察が、かれの極めて思弁的な一般的な観念に意味を与えた。かれの見事な解明と引例とが教師としてのかれの成功のもとづくところであったのかも知れない。かれの引例は、かれ自身の形而上学的理論を直接に支えることが出来ないようなものであった場合でさえ、普通に受け入れられている哲学的観念の限界を際立たせることがしばしばあったからである。ホワイトヘッドの形而上学に対する興味が最近復活しつつあるのは、一部分、かれの思想のもつこういう特徴と関わりがある。

一般的包括的な諸原理を明らかにしようとする努力において、ホワイトヘッドは多くの同時代人の抱いた形而上学の見方に従っているのである。G・E・ムアは今世紀始めの講義（一九一〇―一、一九五三年『哲学のいくつかの主要問題』として出版）において、哲学は「存在するいろいろなもの」（kinds of things there are）とそれらが相互に関係しているさま、とを明らかにせねばならぬ、と主張した。ムアの目差したのは、現に存在するところのものの包括的な吟味であった。この包括的な目標をホワイトヘッドは明らかにムアと共有している。ラッセルもムアの講義から多くの内容を借りて、同様な見解を述べた。それはラッセルの『哲学の諸問題』と『外界についてのわれらの知識』とを見れば明らかである。アメリカではデューイが、哲学の仕事は現実存在の一般的特徴を認知することである、と主張していた（『経験と自然』五一頁）。デューイの目標は、諸科学の特殊な限られた関心とは反対の、包括性にあったのである。そしてその後ラッセルやデューイやムアは（ムアの場合はすくなくともかれの主要な関心が）哲学についてのこのような考え方から離れていったけれども、ホワイトヘッドはこの考え方の重要性を最後まで確信していたのである。*

＊　私はここで包括性についての四人の意見の一致のみを述べているのであって、それに加わるところの、かれらの意見の大き

な相違のほうは問題にしていない。しかし実を言えばラッセルは『外界についてのわれらの知識』においてすでに、「ある仕方で想像に訴えることによってのみ受け入れられる、広い未検証の一般概念」（四頁）に反対している。そういう概念が多くの哲学の特色を成しているようにかれには見えたのである。ラッセルの要求したのは「一つずつの、細かな、検証可能な結果」なのである。

ホワイトヘッドが一九二五年から三三年に及ぶ時期において三つの主著を公にしたことは注目に値する。すなわち一九二五年には『科学と近代世界』、一九二九年には『過程と実在』、一九三三年には『思想の冒険』を出している。これに加えて、一九二八年に出した『象徴、その意味と効果』という、小さいが貴重な冊子をも挙げねばならないであろう。一九二五年から三三年までのこの時期は異常に生産的な時期であって、以前にホワイトヘッドが主に科学の哲学に携わった一九一七年から二二年までの期間に並び立つものである。

さてホワイトヘッドがその形而上学の主著を書いた時期は、大陸における論理実証主義の勃興と、イギリス・アメリカ哲学界への、それの急速な伝播との時期に、一致する。すなわち論理実証主義の影響は二十年代の終りから三十年代の始めにかけて感ぜられ始めたのである。カルナップは『哲学における偽（にせ）の問題』を一九二八年に公にし、一九三五年には、影響するところの大きかった英語の小著『哲学と論理的構文論』を公にした。つづいて一九三六年にエイヤーの『言語、真理、論理』が出ている。

これら初期の実証主義の著述の示す一般的な傾向は、もちろん、著しく反形而上学的であった。それでホワイトヘッドの『過程と実在』は、論理実証主義の説が排斥し不信におとしいれようと目差していた種類の哲学にほかならないのである。しかし、ホワイトヘッドが論理実証主義の諸説を直接に論じたことは極めて稀であった。この点でかれの述べたところは、多くは批評への答弁または答弁の試みであって、はっきり論理実証主義への反論として述べられたものではなかった。ホワイトヘッドは形而上学反対論にとり囲まれながら、一途に形而上学を追求したのである。

確かにホワイトヘッドの位置は独特なものであった。数学者論理学者としてのかれの名声は最高級のものであった。論理学と精密科学とについてのホワイトヘッドの解釈を人々がどのように考えようとも、ともかくもホワイトヘッドは、それらの事柄についての第一流の知識をもって語ったのである。形而上学に関心を有する現代哲学者の他の誰もこの点でホワイトヘッドの名声に匹敵しうる者はなかったのである。

明らかに論理実証主義に反対してホワイトヘッドは、世界とその本性、世界の要素と要素間の相互関係、についての、一般的な包括的な内容的な主張を述べることへと進んで行った。かれの念願は、科学と人間経験と感受との極めて多様な相を、一般的原理の下に統一することであった。そしてそういう企てを、ホワイトヘッドが冒険的な困難なものと見ていたことは疑いを容れない。いろいろな議論や話し合いにおいて、かれがとくに強調したのは、形而上学的諸観念が暫定的なもので、いつも作り直す必要のあるものだ、ということであった。かれ自身の考えは、主要な点では確定してはいたが、いわゆる「最後的真理」という概念は、かれにとっては常に厭うべきものであった。自分自身の体系を最後的真理だと主張するなどということはかれの思いもよらぬことであった。「包括的な、しかし暫定的な、諸原理を探究すること」と言えば、形而上学的努力に対するホワイトヘッドの見解をもっともよく特徴づけたことになるであろう。

しかし、この態度はホワイトヘッドが哲学に対してのみ採った態度ではなかった。著書や講義においてかれは、西欧科学の歴史における最も重要な教訓だとみずから考えていた事実を、絶えず強調した。たとえばニュートン物理学の破綻を、それのさまざまな論理的困難と、それが説明し得ぬ経験的事実とに照らして、明らかにするのであった。ニュートン物理学の破綻というこの事実、および論理学と数学との基礎に潜む逆説の発見という事実は、ホワイトヘッドの思惟がしばしば立ち戻っていった事実であり、明らかに、あらゆる理論的努力に関するかれの見方に極めて深い影響を与えていた。

しかしながら、それにも拘わらず、ホワイトヘッドは、理性を、言い換えれば合理的探究の態度を、決して放棄しなかった。ベルグソンとは異なり、*また恐らく西田とも異なって、科学と哲学とが持つさまざまな限界および困難も、ホワイトヘッドをして直観的乃至超理性的方法を採るにはいたらしめなかった。ホワイトヘッドによれば、経験の宏大さと複雑さとは、最後的な理論的理解のかなたにあるであろうが、**しかし理解への唯一の道はどこまでも理論を経由する道なのである。

* 一九三六年十一月二十八日の講義。『自らのもつ制限によって事物の姿をゆがめるのは、知性ではなくて感覚である。この点をベルグソンは見誤った。落度は知性にはなくてわれらの経験の限界にある。だからベルグソンは知性を正しく扱っていないと私は考える。ものをゆがめて見ることは、意識の機能としての経験のなす勝手な限界づけによって生ずる。勿論この限界づけも間違っているのではない。それは未完成なのである。』

** 一九三六年十一月二十八日の講義。『あらゆる形而上学的体系は未完成の段階に停止している。』

第一章

『われわれの諸観念の背後には前提がある。前提の背後にはある程度の明晰さがある。たとえばわれわれは、われわれがハーヴァードにおける一つのものであり、それはまた宇宙における一つのものである、ということができる。つまり個別者の背後には常に前提があるのである。哲学はこのような一般的な諸前提をある程度まで明晰にしようとする努力である。哲学はあれこれと思いめぐらすこと（roving thinking）の一種である。われわれが街路で車を避けるとき、また遊戯をするとき、また選挙運動をするとき、さまざまな前提がおかれている。逆にわれわれのこれらすべての活動はある種の前提命題を明晰ならしめているのである。哲学とは様々な種類の明晰さを検討することである。蔭に潜んでいる諸前提を検討することである。そういう検討の目差すところは、現に起こっている事柄の合理的な理

解を得るということにほかならない。一言で言えば、哲学とは、如何なる特殊な知識も排除せぬ一般的合理化のことなのである。』（一九三六年十月一日の講義）

ホワイトヘッドがハーヴァードでの最後の一連の講義の始めに取り上げたこの主題は、かれの哲学的方法の一つの相を極めてよく現わしている。それはまた『過程と実在』の始めの章の複雑な議論の中で一つの目立った要素として現われている。この主題の重要性はいくら強調してもしすぎるということはない。何故ならこの主題は、ホワイトヘッドの全哲学の数えきれぬ程多くの場所に、分岐して現われているからである。次の簡単な例がそのことを示すであろう。われわれが「ソクラテスはアテネに住んだ」ということに同意するとせよ。この言明はわれわれの注意を、ある不定の時期におけるアテネの都市国家の一員としてのソクラテスに向かわせる。しかし、ある幅の時間が背後に予想せられている。すなわち、そういう意味の「蔭に潜む前提」(penumbral presupposition) があり、その前提は視野の明るい中心へもたらされうるのである。そこで「ソクラテスはペリクレス時代に生きていた」という言明が、以前にただ蔭に潜んでいたものをあらわに示す。更に又、ソクラテスが一人の人間であったこと、多くの「もの」(item) の中の一つの「もの」であったことは、この言明のうちにはあらわに示されていないところの、「個体」(individuals) についてのある事柄を前提している。一つの「もの (item)」とは何であるか、この問いはホワイトヘッドの哲学が答えようと企てている中心的な問いであると考えてよい。個体としてのソクラテスの観念の背後にある前提は数えきれない程多く、それを明らかにすることはもっとも困難な課題の一つなのである(Cf. P. F. Strawson, Individuals, An Essay in Metaphysics.)。さて更にもう一つの点を持ち出そう。一人の人間としてのソクラテスはかれの本性についての何事かを前提にもっている。われわれはソクラテスが道徳的決断をなしたこと、かれが善い行い、或は悪い行いをなしたことを前提している。この蔭に潜む前提（もとの主張の蔭にある前提）をとり出すことは、前とは別の種類の考察をとり上げることである。ところでホワイトヘッドの問うのは、歴史的個体としてのソクラテスと道徳的存在者として

のソクラテスとの両者の背後にある前提が何であるか、ということである。言い換えると、ホワイトヘッドはソクラテスのこれら二つの相のいずれをも包含する一般的原理を求めるのである。問題をもっと極端な形にすれば、生物としてのソクラテスと倫理的存在としてのソクラテスとのいずれにも通ずる原理は何か、ということである。これら二つのソクラテスは明らかに別々の「もの」ではない。二つのいずれをも排斥せずいずれをも考慮に入れるところの「合理化」(rationalisation)(これはホワイトヘッドの用語である)をわれわれはもとめるのである。そこで再びわれわれはホワイトヘッドの形而上学の主な関心事の入口に立つわけである。他の哲学者ならば、デカルトがやろうとしたように人間を二つの違った要素から合成されたものと考えようとするかも知れない。けれども人間の本性には何か基本的な統一があるというわれわれの感じは、合理的な哲学が明らかにせねばならぬ隠れた前提へ導く手懸りなのである。

それ故に、前提についてのこの説は二つの面をもっている。すなわち、第一に、経験における一つの要素を強調することにより、われわれは注意の背景に残されている他の諸要素を無視してしまう、ということである。また第二には、経験の或る選ばれたいくつかの側面を強調することにより、われわれはそれら側面の相互関係に関する一層広い一般的な原理を見逃してしまう、ということである。「蔭にかくれている」(penumbral)という語は、一般に、観念の任意の体系の前提としてありつつしかも明瞭になっていないところのもの、を指すのであり、更に大切な点を言えば、前提として存在しとくに哲学があらわにせねばならぬところの広い一般原理を指すのである。ホワイトヘッドはハーヴァードでの最後の一連の講義において「不明瞭さと明瞭さ」という主題に相当長い時間を費した。* この主題は『過程と実在』の第二章にもまた示されていて、そこでは、たとえば、われわれがわれわれの視覚経験を言い現わしたり表現したりすることはたやすいが、われわれの情緒や感情を言い現わしたり表現したりすることはむずかしい、という事実を挙げて力強く述べられている。情緒や感情は視覚経験と同様にわれわれの経験において重要なものなのであるが、しかし明瞭さを目差す場合には無視されるのである。情緒や感情は経験の不明瞭な蔭にかくされた背景を形づく

り、十全な哲学の体系の中では或る程度の理論的な定式化を受けることができる。ホワイトヘッドはかれの話をつぎのように要約している。「私が主張したいのは次のことである。学者の間では、われわれが不要なことがらを捨象するのだ、という馬鹿げた考えがある。実を言えばわれわれが捨象するところのものは、実際極めて重要なものなのである。けれどもわれわれはわれわれの行動を導くために、または、ある特殊な享受に達するために、われわれの全意識を或る僅かな数の関係に集中するのであり、しかもそれらの関係は、われわれがその時考えていない他の多くの関係を前提しているのである。われわれが捨象するのは不要なことがらではなく、われわれが捨象せずに取り上げた部分において前提せられているところの重要な諸事実なのである」**。ホワイトヘッドのこれらの言葉の意味するところは「不明瞭さ」を弁護することではなく、むしろ、哲学は経験のあらゆる側面を考慮しようと努めるところの合理的体系であると主張することなのである。この点は『過程と実在』の最初の節に強く述べられている。すなわち、哲学的観念の体系は「適用可能」(applicable) であり「十全」(adequate) であらねばならぬといわれている。すなわち、それは経験に適用され得ねばならず、しかもあらゆる経験に適用されるという意味において十全でなければならぬのである。ホワイトヘッドはこの考えを自からの「経験論」と呼び、形而上学において純粋なアプリオリな方法をよしと信じている合理主義者たちからかれ自身を引き離すために、その点を強調しているのである。のみならずホワイトヘッドはすくなくともその意図においては「根本的経験論者」(radical empiricist) であると言ってよいであろう。なぜならばかれはヒュームのような経験主義の考え方の哲学者に対してさえも、体系が「十全」でなければならぬと主張しようと欲するのだからである。体系が十全でなければならぬということはそれが経験のいかなる側面をも考慮に入れずに済ませてはならないということである。用語の上から言っても意味の上から言ってもこれは極めて強い要求なのである***。この点における困難はこの要求の適用の条件をどういうふうに解するかにある。これは後にわれわれの見るであろうごとく、ホワイトヘッドの形而上学の全体にわたる一つの根本的な問題点なのである。

＊　これは一九三六年十二月三、五、八日の講義の主な主題である。

＊＊　一九三六年十二月三日の講義、かくれた前提についてのこの説の基礎にある合理主義はホワイトヘッドの主張の本質に属する。

＊＊＊　「十全」(adequate) が「必然」の概念を定義する。すなわち、体系はもしそれが経験に対して「十全」であるなら、「必然」なのである。

ところで合理的体系そのものの方から言えば、ホワイトヘッドは、当然ながら、体系が論理的無矛盾性 (logical consistency) をもたねばならぬ、と主張する。しかしさらに体系の斉合性 (coherence) の要求が立てられており、これは特に重要である。一つの体系の含むさまざまな主張が充分に理解されるために互に他を要求し合う、という場合に、その体系は斉合的なのである。この斉合性に比べると論理的無矛盾性は、より弱い要求である。たとえば或る人が物質に関して或る説を採用し、ついで精神に関してそれとは全く違った説を主張するとしても、その人は論理的に矛盾を犯してはいない。けれどもその人のやり方は不斉合である、とホワイトヘッドは主張するであろう。何故なら、一つの体系の含むいかなる説も孤立してあることは出来ず、その体系の他の部分を俟って始めて理解されうるものなのだからである。*

＊　クワイン『論理的観点から』(Quine, W. van, From a Logical Point of View) 参照

『過程と実在』第一章における最も重要な方法論的概念は、「想像的一般化」(imaginative generalisation) の概念である。ホワイトヘッドの意味での思弁的形而上学の企て全体がこの概念を基礎としている。『過程と実在』そのものがこの概念の例示であり理由づけである。そして恐らくこの理由によってホワイトヘッドは、想像的一般化の意味するところについては極めて簡単な叙述を与えているのみなのである。しかしともかくその考えは直截に述べられている。すなわち、まず、経験の限られた範囲に適用できる一般概念をとり、それをさらに経験の全体に適用しようと

試みる、ということである。このことを企てる場合にどういうふうにやればよいかは明らかでないが、しかし或る程度までそれは試行錯誤の方法である。というのは、そういうふうにして哲学的な一般性にいたろうとする試みは、経験に対して「不十全」であると判明することもあるであろうからである。一般にホワイトヘッドは、哲学的一般概念の選択が或る程度までその時代の歴史的背景によって条件づけられる、と考えている。正しい概念を察知（divination）することは、この察知という語が意味しうるように、一つの直観（insight）である。* 一つの科学の理論が或る数の事実の可能的説明として、創造的な科学者に思いつかれるのと同様に、或る原理すなわち一般概念が経験を説明するに用いられうる、ということが一人の哲学者に思いつかれうるのである。実際、科学における想像の役割は、知識の起源と発展についてのホワイトヘッドの解釈に繰り返し現われる主題である。科学も哲学も「想像的衝動」に基づくさまざまな変化を絶えず経験している。「あらゆる生産的思想はいままでのところ、芸術家の詩的直観によって、あるいは、思想の枠を想像によって精錬し、それを論理的前提として用いうるようなものに仕上げることによって、生み出された。」（『過程と実在』一四頁）

* 『科学と近代世界』（六五頁）においては「察知」という言葉をいくらか違った意味にホワイトヘッドは用いている。『特定の過去の既知の特徴から特定の未来の或る特徴を察知すること（devination）』。

さてすでに注意したように、つくり上げられた形而上学的思想の枠は、事実（すなわち経験）の全領域と照合して判定されねばならない。経験のあらゆる要素が考慮に入れられねばならない。『過程と実在』の第一章で、* ホワイトヘッドは一度「常識」を引き合いに出している。「常識」という、どちらかと言えば何気ない言葉は、始めにそう見えるよりもずっと強い意味を持っているのである。ホワイトヘッドが「すべての事実」** という言葉で意味するところは、実に常識上の信念なのであり、言い換えれば、その時代の教養ある人間の常識の抱く信念なのである。しかもホ

ワイトヘッドの「すべての事実」というとき、それは、科学的研究の一般的成果であって教養ある人が多少とも心得ているような事実（例えば進化論、相対性理論、歴史のごとき）のみならず、社会的正義や美や宗教について教養ある人がもつ信念およびそれに伴う特定の感情あるいは情緒をも含む。*** 教養ある人の常識には、哲学体系が保存せねばならないものが常にふくまれている。ホワイトヘッドはしばしばそのことを否定的に言い表わしている。すなわち、普通の分別ある共通意見は抑圧したり無視したり出来ない、と言っている。しかし形而上学体系によるそういう意見の解釈は、教養ある人が、自分の信念だとすくなくとも始めに思い込んでいるかも知れぬ事柄とは、遙かにかけはなれたものとなりうる。『過程と実在』第一章におけるホワイトヘッドの宗教についての言葉はこのことを極めて明らかに示している。「哲学は宗教の存在を認め、それを変形する。逆に言うと宗教は、哲学がその体系のうちに組み込まねばならぬところの、経験の所与の一つなのである」（『過程と実在』、二三頁）。ところで次の文章は、宗教的所与の哲学的解釈が通常の宗教的信念から如何にかけ離れたものとなりうるか、を示す。「宗教とは元来概念的思想にのみ属するところの非時間的な一般性を、情緒のもつ頑強な個別性の中へ注入しようとする究極的な渇望である」（『過程と実在』、二三頁）。これはそれ自身極めて興味深い言明である。それは宗教的事実を保存しているかも知れないが、しかしやはり高度な反省を経た哲学的な主張である。

* 『過程と実在』一三頁。ホワイトヘッドが常識について述べているところは首尾一貫していないように見える。かれはときには常識をこの上なく尊重したように思われる。たとえば一九三六年十一月三日の講義において、かれはつぎのように述べた。「常識というものはどちらかと言えば稀なものである。しかしそれはつねになければならぬものである。というのは常識を持たない人があるとわれわれは癇癪を立てるから。常識は日常生活のやりとりを正しく行う能力である。常識は一つの行為の自然な結果をみてとる能力である。常識は型にはまった考えの反対であり、一種の独創的な能力である。」ホワイトヘッドが常識を悪く言う場合にはかれは型にはまった考えを念頭においているようである。

** 「裸の事実」(bare facts) というものは存在しない。

＊＊＊　この解釈の強調している点は、ホワイトヘッド自身が、特に講義において、実際に強調した点なのである。しかしながら、『思想の様式』ではかれはこう書いている。「われわれが哲学にとりかかるとき、最初は、学識というものを斥けなければならない。文明人の普通の社会関係から生ずる単純な考えをよりどころにせねばならない」。これは上の解釈に反するようであるが、この節に含まれている「文明人の普通の社会関係」という句が、この節と上の解釈とを再び調和させるであろう。

第二章

『過程と実在』第二部第一章『事実と形相』は、ホワイトヘッドの形而上学にとっての本質的な視点の数々を定めている。従ってこの章の叙述の多くは極度に圧縮されており、それらを明らかにするには、この書物の残りの部分を考えに入れる必要がある。それゆえわれわれのここでの議論も予備的であって、後の章において修正を受けねばならぬであろう。

「永遠的客体」(Eternal Objects)

最初に述べられていることは、ホワイトヘッドの主張をプラトンの主張から、あるいはすくなくともプラトンの通常の解釈から、引き離す点である。すなわちイデアと事実の世界との、言い換えれば形相と事実との、分離の否定である。イデアすなわちホワイトヘッドの用語では「永遠的客体」は、事実の世界から離れた存在をもたない。*永遠的客体は「現実」(actualities) から独立な実在性をもたない。「永遠的客体」とは「事実の形相」であり事実からただ観念的にのみ分たれうる対象である。(学説としては、形相についてのこの考えは、プラトンよりもアリストテレスに近い考えである。もっともホワイトヘッドはいろいろな理由により、プラトンの方を、より重要な思想家として重

んじたのであったが)。

＊　一九三七年三月二十七日の講義「意識的感受。これの所与は純粋な形相（永遠的客体）である。私の意味はこうだった。「客体」という語によって、私は、それがわれわれに知られる場合にいかなる直接な作用力をも全く欠いているということを、明らかに明示しようとしたのである。また永遠的という語によって私は、その本性上、歴史のいかなる部分にも根を下ろしておらず定着してもいない或るもの、を意味したのである。たとえば太陽は、太陽が存在している宇宙のこの時期に属している。これは太陽が歴史への関係をもつことを示している。しかしながら「赤い」とか「赤さ」とかを一般的に問題にする場合、それらがどこに見出されるかを示す点はそれらには含まれていない。「赤い」ということを理解したとて、その「赤い」の本性のうちにはそれがどこに現われるかを告げる点は何もない。」

「確定性の形相」すなわち「永遠的客体」は、或る特定の時期において現実に存在する世界秩序を特徴づけるところのものに尽きるわけではない。現実化されなかった形相が多くあるわけである。しかしそれらは、それらが現実から排除されたということによって、やはり、間接に現実への関連をもつのである。それらの形相は自然の「可能的」(potential) 形相であり、自然への関連において「等級づけられている」(graded) とホワイトヘッドによって解釈されている。この説の背後に働らく有力な考慮は進化の事実に対するホワイトヘッドの見方である。長い進化の過程において、時々、新しい構造すなわち形相が出現する。これらの形相は以前に存在したものに対して真の意味で新しいものなのである。われわれは進化の過程において出現する生命の新種が自然のうちに既に存在していた諸条件の産物であるかの如くに語ることが多いが、そういう考えをホワイトヘッドはきっぱり却けるのである。すなわち、新しい形相はすでに存在する諸条件に依存はするけれども、その新たに現われる形相自身は、自然のその状態に直接なかかわりをもつ一つの「永遠的客体」なのである。そしてそういう「永遠的客体」が実現せられたものとして、その形相は「新しい」ものなのである。たとえば水の出現の条件は一部分は水素と酸素との存在であるが、水素と酸素とが化

合して水となることは自然の中に新たな構造すなわち形相が出現することなのである。「永遠的客体」に由来する新たな形相が時々自然に突き当り、「侵入」(ingress) するのである。プラトンの言葉を借りて言い換えれば、進化の過程における自然は、次第に、より複雑な形相を「分有」するのである。またその反対の過程すなわち形相の喪失または消滅も、自然の重要な一面である。

ホワイトヘッドがアリストテレスよりも明らかにプラトンを好む理由は、一部分、プラトンが数学を形而上学において重要であると認めた点にある。論理学と数学とはホワイトヘッドにとっては、最高の一般性をもつ「確定性の形相」に属し、おそらく「永遠的客体」の合理的な理解の最上の例である。プラトンはチマイオス篇二七Dにおいて、常に存在し、生成するのでないものは、何であるか、と問うているが、ホワイトヘッドがこの説に対し抱いた関心は、プラトンが過程の「永遠的」形相と過程そのものとを区別したことに基づいている。同様に、チマイオス篇二八Aにおいてプラトンが、形相が理性の対象であることを強調しているのは、ホワイトヘッドの一般的主張とよく一致している。しかしながら重要な形而上学的相違は存在する。すなわちホワイトヘッドは、形相言い換えれば永遠的客体そのものに、実在性を帰することは決してない。「永遠的客体」は単なる可能性であり、それが現実に存在するのは宇宙の事物あるいは実体において例示される場合のみなのである。

「具体的事実」

「真の哲学的問題は、いかにして具体的事実がその事実自身から抽象されしかもそのもの自身によって分有せられるところの諸存在を、呈示しうるか、という問いである」(『過程と実在』三十頁)。この問いは形而上学の重点を具体的事実の理論におくことになる。その理論は、いかにして形相が実在的世界を構成する個別的存在者と関係づけられるか

を示さねばならない。この理論の基礎的な前提は、世界が、過程においてある存在者によって構成されている、ということである。さて現実的存在の多数があり、それらのすべては同一の一般的範疇によって理解されねばならない。もっともそれらの存在は範疇を例示する仕方において互に大きな相違を示しはするが。「現実的存在」(actual entity)という語は、伝統的形而上学における「個別者」(particular)とか「個体」(individual)とか「実体」(substance)とかいう語に代るものである。しかし伝統的な見解との相違はホワイトヘッドの思想にとって本質的である。すなわち、一つの現実的存在は一つの「出来事」(event)であって*、アリストテレスのいう実体ではない。アリストテレスの言う実体は「絶対的な個別者」と名づけうるであろう。アリストテレスの説によれば、様々な述語(言い換えれば特性)および様々な関係によって変容させられるが、それ自身は存在論的に変容からは独立であるような、主体(または実体)があるのである。つまり実体はそれ自身変化するものでなく、変化の担い手なのである。しかるにホワイヘッドにとっての究極的な存在は、生起するもの、言い換えれば、出来事である。たとえば一人の人間は、ゆるやかに進化する自然を背景においてみれば、比較的短時間のしかも複雑な出来事である。しかしたとえば一つの閃光または爆発と比較すれば、非常に長い時間にわたる出来事である。**「現実的存在」(「現実的生起」)が存在の究極的要素なのである。この想定はその理論的精錬とそれを経験に関係させた場合のそれの十全性とによって正当化されねばならない。

* 『過程と実在』一二四頁、「一つの現実的生起(現実的存在)は出来事の極限的形式である」。

** このような言い方は誤解を招くおそれが幾分あるかもしれない。というのはホワイトヘッドの時間と過程とについての理論は、極めて複雑な理論であるから。(これは後に論ずる。)

現実的存在は自然において生起し、その成立を何よりもまず環境に負うている。環境は結局のところ他の現実的存在の全体である。ただし直接な環境が特に重要なのである。くりかえしていえば、与えられた一つの現実的存在(さ

らに一般的にいえば一つの出来事）は他のすべての現実的存在に依存しており、しかも、あらゆる実際的目的にとってのみならず更に専門的な科学的関心にとっても、ただ限られた数の関係だけが考慮に入るのである。故にあらゆる現実的存在は、その独自な現存のために他のすべての現実的存在に直接間接に依存しているのである。この形而上学的な一般命題は、哲学が、思想と経験との蔭になっている背景の中の一般的前提をあらわにせねばならない、とホワイトヘッドがいう場合にかれの意味している事柄の一例を示すものである。

ホワイトヘッドのもっとも大胆な思弁的な観念の一つは諸現実的存在の間の結合または関係の本性に関するものである。それは「把握」(prehension) の説であり、ホワイトヘッドの全形而上学的体系の中心的位置にある。この説を理解する一つの方法は、ホワイトヘッドが、すべての現実的存在と出来事※との間に成り立つ結合について、考えをめぐらしているのであるということを想い起こすことである。そしてこれらの現実的存在乃至出来事は極めて多くの種類のものを含む。たとえば熱による金属の膨張とか、動物の生長とか、ソクラテスの裁判とか、美しい対象の経験とかを含む。ところでこれらすべての出事事は先行する出事事に依存している。そこでホワイトヘッドは尋ねる。個個の場合に応じて適切な制限を加えれば、これらすべての出来事と、それらが、それらの環境（つまり他のすべての存在あるいは出来事）に対して有する関連、とのすべてにあてはまるような一般概念として、どのような概念が呈出されうるであろうかと。この問いに答えるにあたってホワイトヘッドは、形而上学者の仕事としてみずから提案した事柄自体を実行する。すなわち、普通には事実の一領域に限られている概念を採ってその概念がすべての事実にあてはまるように一般化され得ないかどうかを試すことである。かれが「感受」(feeling) という語を「把握」(prehension) と同意味に用いたことは、かれが何をなしたかを明らかに示している。かれは通常生物体に適用される概念を借りて、その適用を、心理的出来事であると物理的出来事であるとを問わず、すべての出来事の間のすべての関連に拡げたのである。

＊　われわれはこと暫くの間、「現実的存在」と「出来事」との間にホワイトヘッドがつけている区別を度外視することにする。

このように言葉すくなに述べると、これほど真実らしさを欠いた形而上学の学説を思いつくことは難しいと考えられるかも知れない。しかしながら『過程と実在』の複雑な議論は、この「把握」の説に幾分かの真実らしさを与えることに成功するのである。この点についてホワイトヘッドの思想の最も有力な主題の一つが、繰り上げられねばならぬであろう。それは、「自然の二元分裂」(bifurcation of nature) という伝統的な考え、いい換えれば、いわゆる物質的過程と心理的過程との間の断絶という考えが、合理性の主な規準すなわち斉合性の規準を破るものである、というホワイトヘッドの批難である。この二元分裂はしかし単に伝統的形而上学的区別であったばかりではない。それは自然についての普通の話の多くのうちにもまた現われ、とくに精神についての言葉と物質的過程についての言葉との対立において顕著に現われている。このことを合理性の規準は許容し得ないのである。概念的体系の目的はこのような理論的不調和を除去することであり、ホワイトヘッドの把握の理論は、それが十分に展開せられた暁にはそういう役割を果すことを期待せられているのである。

現実的存在の説の他のもう一つの側面を、この際述べておかねばならない。現実的存在の概念は、一つの「結果」が、先行する「原因」のみの生んだものである、という主張を否定する。言い換えれば、存在することは或る程度の能動的役割を演ずることであり、何事かをなすことなのである。簡単な心理学的例がホワイトッドの意味するところを示すであろう。すなわち、一つの客体を認知することは、単に刺激の作用を受けることではなく、観察者の側での反応を必要とする。そしてこのような能動的活動は、或る程度まで全自然においてあらゆる現実的な存在において行なわれている、とホワイトヘッドは考える。この説によれば、自然の過程のあるものがそれらの先行原因のみによって説明し尽くされるように見えるという事実は、把握する主体の能動的側面が極めてわずかな働きしか示していないことによるのである。それ故、そのような過程においては、そして、特に或る種の目的にとっては、把握する主体の

能動的側面は無視されうるのである。

かくて現実存在についてのこの全体的な理論は、すべての現実存在が同一の構成をもつ、と主張する。そして一つの現実存在の能動的側面を「段階的に減らしてゆく」(scale down) ことは物理的過程を説明することになり、また、その能動的側面を「段階的に増してゆく」(scale up) ことは有機体を説明することになるのである。そしてその能動的側面をもっとも強めた形では、人間の意識的心理的過程の本性を説明することになるのである。

一々の現実的存在はある程度まで「自己形成的」(self-formative) である。何故なら各々の現実的存在の能動的側面はそれが外から受ける影響に対する「反応」だからである。ところで自己形成はそのもっとも一般的な意味においては目的原因の作用である。現実的存在の能動的側面は選択的であって、一つの形相または構造の単なる「保存」(retention) を指すにすぎぬ場合でも、やはり選択的なのである。それゆえ目的原因の作用は、そのもっとも一般的な意味では、意識的な目的や意図のみを意味するのではない。これらは、宇宙を全体として見る場合、稀にしか現われない、目的原因の作用の極めて高級な形式なのである。「自己形成」という言葉を、ふつう物的対象と呼ばれるものにまで適用することは、困難であるといってよいが、しかしそのことは単純な有機体の段階では遙かにたやすくなる。そしてホワイトヘッドが自己形成の概念を物的対象に及ぼすときいつも基礎においている論拠は忘れられてはならない。すなわち、自然がその全体に通ずる共通な特色を有するということを、斉合性の規準が要求するのである。

ホワイトヘッドは現実的存在（言い換えれば現実的生起）の自己形成的な側面が、最後には「満足」(satisfaction) を生む、と考えている。ここでもまた、普通には高級な生物を特徴づけるのに用いられる「満足」という語が、広い一般的な意味で、把握された諸存在の影響をある確定的な型のうちに統一すること、を意味するものとして用いられるのである。（「具体化」(concrescence) という語はホワイトヘッドが度々用いる一層中性的な用語である。）別の言葉で言えば、現実的存在はそれの現存の現在の瞬間において、外から受ける多くの作用をみずから一つにまとめ上げ

ることの結果として成り立つ或る独自性をもつに到っている、のである。一つの現実的存在は、環境から与えられる多くの「感受」という成分から、いわば合成されているのであるから、一つの存在者としてのそれ自身の本性は、そういう多くの感受の産物であって、しかもそれ自身一つの感受なのである。言い換えれば、その現実的存在の歴史の任意の瞬間において環境が取り入れられ統一される仕方についての一つの感受である。一々の現実的存在はこの点において「それがあるところのものであって他のものではない」。生起の能動的な側面は因果的影響の多を一にする。「それは一つの存在者となったのである」(『過程と実在』七一頁)。

かくて現実的であることは一定の形相すなわち構造をもつことである。しかし現実的であることは未来をもつことを意味する。その未来が極めて近い直接の未来に過ぎぬとしても。しかし未来は現実すなわち現在のうちに表現されねばならない。何故なら凡そ現実的存在に関係をもたぬものは存在しないからである。それ故現実的存在はそれの現在の存在において未来性の要素を示している。そしてわれわれはこれを現在の一側面であるところの予測的な機能と呼ぶことができるであろう。自己形成は未来を或る程度自己のうちにとり入れて統一するという働きを含んでいる。一つのものが現在如何にあるかは、或る程度までそのものが、未来に如何にあるであろうか、ということにほかならない。現実的存在はそれの未来の歴史への関連なしには存在しないのである。この未来への関連をホワイトヘッドは現実的存在の、言い換えれば「主体」の、「客体的不死性」(objective immortality) と呼んでいる。(「客体的不死性」というこの奇妙な言葉の意味は後に明らかになるであろう。)

「形相と事実」

「永遠的客体」と「現実的存在」という二つの要素が今やさらに密接な結合にもたらされねばならない。一々の現実

的存在は他の多くの現実的存在から無限に多くの影響を受けとる（「受けとる」という語の能動的意味において）。そしてこれらの影響はそれぞれが持つ形相すなわち構造のもとにおいて、受けとられる、言い換えれば把握される、のである。各々の現実的存在はそれがまさにそれ自身においてあったとおりに、それを受けとる現実的存在の中において表現せられる。それ自身においてあったとおりにとは、それの固有の性格（その現実的存在による、ある数の選ばれた永遠的客体の具体化）によって、ということである。

一つの現実的存在に他の現実的存在が及ぼす結果とは、他を受けとる現実的存在によって感受せられたところの、他の現実的存在の形相*にほかならない。多数の現実的存在からなる宇宙は一々の現実的存在が他のものを感受すること（把握）によって結合せられている。しかも、この結合は宇宙を構成する一々の現実的存在を特徴づけるところの諸形相、言い換えれば永遠的客体、を通じて成り立つのである。

＊　この点に関してはデカルトとロックが度々引き合いに出されている。しかしホワイトヘッドはアリストテレスを引き合いに出してもよかったであろう。アリストテレスは同じ説を『デ・アニマ』において極めてはっきりと述べているからである。すなわちアリストテレスは視覚が対象の形相を受けとるのだと言っている。精神はこういう仕方で能動的なのである。この点について、またその他の相似点について問い詰められた時、ホワイトヘッドは言った、「自分がアリストテレスを閑却しているのはアリストテレスがつまらぬためでなく、自分が無知なためである」と。

さて、この一般的な主張は「否定的把握」（negative prehension）についてのホワイトヘッドの説によって補われなければならない。ある与えられた現実的存在によって把握されたものの持つ多くの（否定的）な限界は、肯定的に把握された存在と全く同様に、当の現実的存在の本性にとって重要である。一つの存在者の本性において、外からの影響の排斥ということは、影響の受容ということと同様に、重要である。たとえば一つの椅子というような限られた形をもつ存在者は、それが肯定的にわがものとしているところの構造あるいは形相によっても、また、それの「歴史

的径路」(historic route) が排斥するところのものによっても、理解できるのである。影響の受容と排斥とについてのこの説は、一層細かく考え直されて、過程の世界における個体の理論を、提供するのである。

上に挙げた諸説が一般に十全であって「経験」の全領域に対して適用可能であるということを示すことが、『過程と実在』の主な目標なのである。特にホワイトヘッドが、物理的変化の現象と心理的過程とのいずれをも説明する一般理論を求めていることは、絶えず念頭におく必要がある。かれの解釈と引例とはしばしば物理学と心理学とから採られている。物理的変化のヴェクトル的性格と心理活動の選択的自己決定的性格とは、ホワイトヘッドの考えでは、近い類似を示しているのである。*これらの点は後に再び取り上げるであろう。

* 一九三七年三月十六日の講義で、ホワイトヘッドはこの類似に注意するように言った。一九三七年十一月十日の個人的な談話においてかれは(『過程と実在』第二部第三章に関して)こう言った、「私が考えていたのは二つの相似た過程である。すなわち力の平行四辺形と、外からの影響によって規定されるわれわれ自身の心とである」。

第三章

ホワイトヘッドはしばしば観念論者と呼ばれる(ときには万物有心論者とも呼ばれる)が、しかしかれが二十世紀始めの英米哲学において有力だった観念論に対して加えた批評は仮借なきものである。ホワイトヘッドはムアやラッセルと共に、ブラッドレーに反対し、ブラッドレーが個別者と関係との実在性を否定したことに反対した。ブラッドレーの中心的な主張は、関係の実在性を認めること、言い換えれば、「外面的」関係を認めることは、自己矛盾的であり、且つ、関係を内面的なものと考えることはまた、個別者を実在的と認める主張を不合理なものにしてしまう、ということである(「AR_1」における A〔関係 R_1 においてある A〕は、「AR_2」における A、と同一ではありえないことになる)。しかしながらホワイトヘッドによれば、個別者についての正しい解釈は、個別者の概念がむしろ関係

を要求し、且つ、その関係によって、個別者は個別者としての唯一性を保持しながら、他の多くの個別者と結合される、ということを示すであろう。

この主張に対するホワイトヘッドの理由づけは、主としてかれの「過程」の説、言い換えれば、「出来事」の理論、に基づいている。われわれは既に、一つの現実的存在が、他の多くの現実的存在からなるみずからの環境に対して有する関係についてのホワイトヘッドの説を、部分的に検討した。一つの現実的存在は結局他の現実的存在との多様な関係（ホワイトヘッドが時に用いる言葉で言えば「所与」(data) の中に「解消される」(dissolve) と考えられるかも知れない。しかしながら、一つの現実的存在は単に、多くの関係の積や和にとどまるのではない。またホワイトヘッドの主張を繰り返えし述べることになるが、一つの現実的存在とは、それが他の多くの存在に対してみずからの持つ関係を複合的全体へ統一する働きなのである。現実的存在を真の意味で個別者、言い換えれば、原子、であらしめているのは、現実的存在のこの能動的自己形成的側面である。

ここでホワイトヘッドが度々ヒュームに加えた批評を引き合いに出すことが恐らく有益であろう。ホワイトヘッドよりも後に現われた哲学者たちがヒュームに加えた批評は、一つの個体たとえば一つの物的対象のもつ意味を分析して、それの現象的要素すなわち場合によっては「感覚所与」(sense-data) と呼ばれるものに、還元してしまうことは出来ない、ということである。そしてこの議論に時に含まれる主張に、現象論は個別者（言い換えれば、対象）の想定をもとにしてのみ意味をもちうる、という議論がある。この議論にホワイトヘッドは全面的に賛成するのである。ヒュームはその『人性論』において自己を「印象の束」と解釈した後、その解釈についていくらかの疑いを表明しているが、それはホワイトヘッドの主張によれば上の困難を暴露しているわけである。ヒュームは自分の分析が何ものかを捉えそこねていると認めているのである。

結局、唯一性はホワイトヘッドの考えでは現実的存在の自己形成的側面をもととして成り立つ。一つの個体すなわ

ち一つの個別者はつねに、そのもつ多くの関係以上のものなのである。（この関係は、ホワイトヘッドにとっては常に、他の現実的存在の把握である。）個別者の説を否定することは常識のもっとも頑強な判決の一つを否定することとなるであろう。これはムアもラッセルもホワイトヘッドも等しく抱いた考えなのである。絶対観念論はまさに常識とのこの対決において敗れるのである（Cf. Moore, Some Main Problems of Philosophy, chap. 1）。

任意の現実的存在のもつ把握は、他の現実的存在から派生している。派生ということは時間的関係を含んでいる。従って一つの現実的存在の把握的反応は、その現実的存在がみずからの過去に対してもつ関係である。たとえその過去が極めて近い過去（たとえば一秒前）にすぎぬとしても。ところでこの説の必然的な帰結は、いかなる現実的存在も他のいかなる現実的存在とも同時の関係には立たない、ということである。一つの原子としての各々の現実的存在は、現在のうちに、いわばただひとり立っている、のである。現実的存在は個別者として実体的に（自己形成的存在者として）唯一であり、しかも、このことによって時間的にも唯一なのである。一つの個別者はそれの「因果的」諸条件よりもいつもすこし先に出ている。ホワイトヘッドの形而上学の立てる原子、言い換えれば「モナド」は、他から因果的に派生したものではあるが、しかし単にそれだけではないのである。それらは世界をつくる要素であって、昔の原子論者（唯物論的原子論者でもピタゴラス的原子論者でも）がかれらの世界を建築したのと似たやり方で、ホワイトヘッドはこの要素からかれの世界を建築するのである。*

＊『過程と実在』一一三頁、「私は出来事という語を、より一般的な意味で、多くの現実的生起が外延的連続の一定量のうちに、ある特定の仕方で互に関係づけられて、成立した一つの結合体、を意味するものとして用いることにする。」

今やわれわれは「出来事」の考えに立ち返り、この概念のいくつかの側面をみることにしよう。われわれが上に取り上げた世界の単位すなわち原子は、極限的形式の出来事である、とホワイトヘッドは言う（『過程と実在』一二四頁）。

すなわち現実的存在は存在するすべてのものの究極的単位であるが故に、このような極限的形式の出来事なのである。現実的存在は、これらの単位の複合体から成る段階組織における、いわば下位の事件なのである。われわれの経験する普通の「物」のような粗大な対象、さらにはまた超顕微鏡的な物理的対象（たとえば分子）は、そういう現実的存在の「複合物」(compound) なのである。感覚の対象および物理学の対象は、構成されたものであって推理されたものではないが、ラッセルが提案したような意味でのもろもろの「感覚所与」からの構成物でないことは明らかである。このような種類の複合物を指すのにホワイトヘッドは「結合体」(nexus) という言葉を用いる。諸々の「結合体」、すなわち感覚の対象やその他われわれが現に存在するのを見出すところのあらゆる対象は、すべて複合的な「出来事」にすぎないのである。*

＊　一九三七年三月十六日の講義でホワイトヘッドが要約的に述べた次の言葉は個体についての彼の一般理論の輪郭を示している。「個物は因果的派生の過程である。現在の直接性は自己形成の過程である。すなわち派生の多様を統一する過程である。こういう現在の直接性は綜合である。そこで歴史的過程とは派生の過程であるとともに綜合の過程でもあるところのものである。」

出来事という語は極めて一般的な用語であって、すべての現実的存在（この場合はしばしば現実的生起 actual occasion と呼ばれる）およびそれらから成るさまざまな複合物の無数を意味する。そこでこれらの複合的出来事について真実らしい説明を与えることが、ホワイトヘッドの形而上学の主な仕事となる。たとえば普通の物的対象（一箇の石）は、ホワイトヘッドの存在論においては、一つの出来事である。ところでわれわれはそれがホワイトヘッドの考える原子から合成されていることを認めるに吝でない（それが分子から合成されていることをわれわれが認めるであろうと同様に）けれども、やはりわれわれはその石を一つのものと呼ぶ。石が持つとわれわれが認めるこの唯一性をどういうふうに理解すればよいのか。今のところホワイトヘッドの議論の大筋をさきまわりして述べておくことにしよう。それによれば、多くの原子からなる複合物は、それの要素である原子、言い換えればモナド、言い換えれ

ば現実的存在に、本性において密接な類似をもつのである。複合物は、それが如何に短命であろうとも、その複合物における支配的な一機能に基づくところの或る程度の統一性をもちうるのである。この一般的な主張の根拠については後に検討するであろう。

『過程と実在』第二部第一章の終りのところでホワイトヘッドは表象的直接態（直接表象 presentational immediacy）の概念に注意を集中している。この概念は次の章『外延的連続』の中心的主題となるものである。表象的直接態とは、ある出来事をいわば条件づけているところの、その現象が外から受けた影響の相、を一般的に指示する言葉である。それは、知覚の水準において、最上の例をもつ。なぜなら感覚器官を通じての表象すなわち感覚は、意識的な「直接表象」の例だからである。感覚とは、多くの存在者から成る環境を、一つの複合的出来事すなわち一人の人間のもつ視野から「表現したもの」に他ならない。ところでこの同じ機能は斉合性の一般原理に従い、自然の全体において働いているものと認められる。表象的直接性のもっとも手近な例は感覚的経験から得られる例であるが、これらは全自然を通じて存在する把握の、一つの特殊な形式に過ぎない*のである。知覚と象徴とに関するホワイトヘッドの全理論は、かれが他の知覚理論に加えた批評と同様、上のような考えに基づいているのである。

* 直接表象の「所与」は他の現実的存在から与えられた所与を含むのみならず、当の現実的存在自身の以前の状態が与える所与をも含む。この後者の点は重要ではあるが今のところは論じないでおくことにする。

出来事の最低の水準において、言い換えれば、原子すなわち現実的存在の水準においてすでに、われわれは、把握された諸関係が各現実的存在の視野の中に表象せられてもいる、ということを想定せねばならない。この表象のもっとも全般的な形式、言い換えれば構造が、「外延的連続」なのである。「外延的連続」という語によってホワイトヘッドは「空間」や「時間」というような一層特殊化された形式を指しているのではない。空間や時間は、「全体対部分」・「重なり合い」（over-lapping）・「包含」というような、より原始的な関係をもととし、その上に立つ諸規定なの

である。そしてこのような極めて一般的な構造あるいは条件が、あらゆる現実的存在（言い換えれば現実的生起）のもつ展望を特徴づけるのである。

同じ一般的な見方をラッセルが『外界についてのわれらの知識』のうちで述べている言葉は、適当な制限を加えれば、われわれの役に立つ。「一々の精神が、ライプニッツのモナドロジーにおけるがごとく、自分に固有な視点から世界を眺めていると想像しよう。……一々の精神は各瞬間に極めて複雑な三次元の世界をみる。……知覚された宇宙の眺望のすべてから成る体系を、私は、あらゆる視野の体系と呼ぶであろう」（『外界についてのわれらの知識』九二―九三頁）。この文章が書かれたときラッセルとホワイトヘッドとは、勿論、哲学的に親密な関係にあった。同じ本の後の部分でラッセルは、数学的点の概念が、「包含」（enclosure）の関係からいかにして「構成」され得るかを示す方法を、ホワイトヘッドが「発見」したのだ、と書いている（『外界についてのわれらの知識』一二一頁以下）。この一般的な考え方に対してホワイトヘッドは、外延的連続の説において、一つの存在論的な地位を与えたのである。

いちいちの出来事（言い換えれば現実的存在）は外延的連続に対する一つの展望である。しかし一つの展望としてそれ自身外延的部分に分かたれることはない。それは連続に対してとられた、いわば一つの「構え」あるいは「立場」なのである。ところで外延的連続は、すべての現実的存在に、宇宙におけるそれの「場所」（place）に関して、規準点を与える。一々の現実的存在のもつ一々の展望は、それぞれ現実世界に対する唯一の展望を決定し、それは、空間ならびに時間という一層特殊な形式によって規定すれば、空間的時間的「位置」（position）に他ならない。しかしながら現実的存在それ自身は空間と時間のうちにあるのではない。現実的存在は、空間時間的連続に対して自己を定立するのである。すなわち、一つの現実的存在が他の多くの現実的存在に時間的空間的にどのように関係しているかは、その現実的存在の自己形成的能動的な側面によってきまるのである。しかしながら、現在の宇宙の現実的存在のすべてを支配するところの時間と空間との全般的な形式の示すところによれば、すべての現実的存在は何等かの時

間的空間的展望、言い換えれば「見地」(location)を「実現する」(achieve)のである。ただし一つの出来事の「内容」(quantum)そのものは見地をもたない。それは他の現実的存在との関係においてのみ、ある見地をもつのである。

いちいちの現実的生起は、それの具体化の諸々の瞬間において、時間空間のうちにそれぞれひとつの新たな展望を決定する。各々の現実的存在は「過程」においてある。それは瞬間的に生成し、みずから一つの「歴史的径路」を決定する。過去とは、非時間的現在のうちに表現せられた、先行諸瞬間、にほかならない。そこで、過程とは、一つの具体化から他の具体化への推移であり、また、再創造の一つの瞬間から他の瞬間への推移である。ものが生成するということは、ものが或る時間の間連続的に存在するということとは、全くちがったことである。けれども連続の生成ということ、言い換えれば時間的秩序の創造ということは、たしかにあるのである。一つの現実的存在の歴史、言い換えれば、それの「歴史的径路」は、過去が不可分の現在に「重なり合う」ことによって創造される時間的連続なのである。原子的な(不可分の)諸瞬間は非時間的である。しかしそれらはいわば過去を「含んでいる」のである。ホワイトヘッドはこの説を、絶対的空間と時間とに関するニュートンの体系の影響から、「通常人の」見方を救うものである、*と考えている。ニュートンの言葉「通常人はこれらの性質(時間と空間)をそれらの性質が感覚の対象に対してもつ関係をもととしてのみ考えている」を、ホワイトヘッドは引用している(『過程と実在』一一一頁)。「感覚の対象」の代りに「出来事」を置くということが、ホワイトヘッドが通常人の見方を救う方法なのである。しかし、「出来事」という考えをもとにして、一個の物体が時間のうちに空間を移動するという意味での「運動」を斥けるとなると、「運動」を「出来事」の概念によって新たに定義し直すことが必要となるであろう。そこで、変化または運動は「ある特定の出来事のうちに包含されている多くの現実的生起の間の差異」(『過程と実在』一一四頁)なのである。前に言ったように、一つの出来事は、単位的現実的生起(われわれが「原子」と呼んだもの)の「複合体」であるとするならば、

変化あるいは運動とは、それら原子間の相違をその複合体全体から見たもの、ということになるわけである。まず第一に、一々の現実的存在の時間的空間的なあり方は、「創造的前進」における各瞬間ごとに変ずるであろう。第二に複合的な環境からほかの条件が入り込んで、その複合体の構成要素のもつ「把握」を変ずるであろう。この意味において一つの出来事は、各々が多様な因果的影響を受け且つ反映している多くの現実的存在からなるところの複合体の示す一つの「歴史的径路」なのである。運動と変化とは、多くのモナド（言い換えれば自然の究極要素）から派生した実在的な構成物なのである。たとえば一つの分子は一つの出来事であり、多くの現実的生起の一つの複合体の歴史的径路なのである（『過程と実在』一二四頁）。運動と変化とは、それ自身は運動も変化もしない多くの単位的出来事に基づいて成り立つ。**

＊　ゼノンの逆説の問題は、このように「客観的」時間を排することにより解かれるとホワイトヘッドは考えている。

＊＊　ラッセル、『外界についてのわれらの知識』一六四頁、「あるときに存在したものとは異なったあるものが他の時に存在するのでなければ、変化ということはあり得ない。従って変化は多くの関係と複合性を含まざるを得ず、当然分析を要求する。そしてわれわれの分析の達するものが、より小さい変化であるにとどまるならば、分析はまだ完全ではない。分析が完全であるべきならば、分析の最後に達する諸項はもはや変化ではなく、時間的先後の関係によって関係づけられている諸項でなければならぬ。」

時間的空間的連続は、各々の現実的存在に「表象せられる」世界のもっとも全般的な形式である。しかしながら「表象の直接態」は、経験において与えられた量とともに、経験において与えられた質のすべてを含む。これらの質は、一つの主体（すなわち把握の中心）に対して与えられるのである。このようにしてホワイトヘッドは、みずからの主張が、デカルトの「表現的実在性」（realitas objectiva）や、ヒュームの「印象」の考えや、更に一般に感覚所与の説と、一致するものであると解している。そして強調すれば主観的あるいは独我論的にさえも見えるこの主張を、

ホワイトヘッドは、『外延的連続』の章の終りの部分で、修正している。そういう主観性の強調は、部分的には、ホワイトヘッドが、現実的存在がそれ自身の本性に基づいて、時間と空間とを構成する役割をもっていることを、強調しようとしたために生じているものである。

そのような強調の行きすぎを正すために、「因果的効果」(causal efficacy) という概念が導入せられるのである。「因果的効果」は所与の内容とは違ったあるものを指示する。そのものは「直接的表象」の形式における知覚よりも「一層原始的」なものである。それは、所与の内容が、まわりの世界から由来し派生したものである、ということの感受である。このとき感ぜられるものは、「呈示（表象）された」所与であるよりも、何物かから「派生した」所与である。それは、世界が空想または主観的心像の世界ではなくて実在的世界である、ということの意識である、と言いうるであろう。

この派生の意識は「身体をもつこと」(withness of the body) のうちに明らかに現われている。* この点においてはホワイトヘッドが次のデカルトの言葉を引用しているのは注目に値する。「この手とこの身体とは私のものである」。** 身体は経験をもっとも直接に条件づけるところの「環境」なのである。われわれは、われわれが手で触れ目で見る、という事実を認める。この現象学的「事実」は、自然における因果的相互関係をホワイトヘッドが理由づける場合に重要な役割を演ずるのである。この事実は、世界の中に把握の関係が実在するということの、経験において見出される直接な証拠なのである。

* 一九三六年十一月十四日講義。

「われらの身体の経験はわれらが持つもっとも力強い経験である。しかし身体はやはり自然の一部分である。では身体はどこに始まり、どこに終るのであろうか。」

** 『過程と実在』一二五頁。

それ故にホワイトヘッドの体系のモナドはライプニッツのモナドとは異なり、他のモナドと実在的な関係をもっている。「表象の直接態」は「主観的」ではあるが、それは同時に、他者から派生したものであるとして経験されるのである。この事実を基にしてホワイトヘッドは、われわれが因果的派生の証拠を印象のうちに持って居らぬというヒュームの議論に答えている。*ところで独我論はそういうヒュームのような見解の論理的帰結である。そこでホワイトヘッドは同じ議論によって、物や他人が存在するということを推理によって確める必要があるという議論をも、片付けてしまうのである。

＊　一九三六年十二月一日の講義でホワイトヘッドはこう言った。「経験の中に独立していて、存在するのに他の何物をも必要としないような、実体なるものが、存在しないのと同様に、それを受けとるために他の何物をも必要としないような感覚なるものは、存在しないのだ」。ホワイトヘッドはここでヒュームの「原子的印象」の説に反対していたのである。

今まで述べて来たことに照らしてわれわれはここで、『外延的連続』の章に見出される重要な一節を見直すべきであろう。「この外延的連続は実在的である。何故ならばそれは現実の世界から派生し、且つ、現在の世界にかかわる一つの事実を表現しているからである。あらゆる現実的存在はこの連続の諸限定に従って互に関係づけられている。そして未来におけるあらゆる可能な現実的存在は、すでに現実化している世界との関係において、上の諸限定を実現せねばならない」（『過程と実在』一〇三頁）。

第四章

この前の講義において、現実的存在における、従ってまたそれらの複合体における、「派生」ということの意義を、われわれは強調した。それは自然の受容的受動的側面であった。しかしながら、ときどきはまた現実的存在の統一的自己形成的側面をかえりみることが必要であった。空間的時間的延長の水準においてさえ、現実的存在は、みずから

の局所的な歴史を能動的に綜合することにより、一つの見地を「実現しつつある」ものとして、示された。そこでわれわれはこのような「秩序」（言い換えれば複合）の達成についてのホワイトヘッドの更に立ち入った論議をかえりみることにする。*

＊　この章は『過程と実在』第二部第三、四章への序説として書かれたものである。

ホワイトヘッドの問題が、部分は如何にして「全体」を構成するかという一般的な問題であることを、始めに注意しておくのが便利であろう。この問題におけるホワイトヘッドの関心は、物理的エネルギーの諸ヴェクトルが集積または複合によって或る結果を生ずることを始めとし、有機的全体が物理学的な原因の多数から生ずることや、更にはまた、極めて複雑な身体的心理的条件に基づいて成り立つ、心理的経験の統一、にまで及んでいる。前に注意したようにホワイトヘッドは、ヒュームがかれの「原子的印象の説」によって「自己」のもつ統一性を説明することができなかったのを批難したのであった。

「秩序」についてのホワイトヘッドの説を理解するに当って同様に重要なのは、宇宙における「新しさ」（novelty）の要素である。新たに現われた全体は、その諸部分の綜合としてその諸部分以上のものであるのみならず、すくなくとも時々は、「新しい」という意味において諸部分「以上」なのである。生物の進化における「新たなものの出現」（emergence）の事実、および、人間の新たな社会組織の漸次的発展は、ホワイトヘッドが秩序の理論において「新しさ」の観念によって説明しようとしたところの事実を示している。*

＊　「細部にまで及ぶ決定論（a detailed determinism）という考えほど奇妙なものはない、そういう決定論のいかなる証拠もまったく欠けているのを見れば。」（一九三七年四月十三日の講義）

この点に関してもっとも重要な説は「自己超越的主体」（subject-superject）の概念である。「自己超越的」（superject）要素は一つの現実的存在の「ヴェクトル」性格であり、それの「主体的目的」（subjective aim）である。この

観念は次のようにも言い表わされるであろう。すなわち、自己形成は未来を含む、言い換えれば、空間的時間的前進における次の瞬間と次の相を含む、と。自己超越的機能が、過程における次の瞬間への「繋ぎ」(link)なのである。というのは自己超越的要素は、現在の瞬間を越えて「継承される」ところのものだからである。現在の瞬間が未来への方向を含むと認めるのでなければ、物理的エネルギーの「ヴェクトル」性格も無意味となるであろう、とホワイトヘッドは主張する。一つの現実的存在（エネルギーの基本的要素）の自己形成は、自己自身を越えたものに対するこのような関連を含む。現実的存在を過程の基礎と考えるために最も重要なことがらは、現実的存在の自己超越的性格なのである。現実的存在は自己生産的である。それは自己原因（*causa sui*）である。

このことはわれわれに現実的存在の根本的な非決定性を気付かせる。自己原因であることは、或る程度まで非決定であり自由であることである。現実的存在は「内的には決定されていて、外的には自由である」(『過程と実在』四一頁)。それはまさに、それが自己形成的すなわち自己決定的であるという意味において、「外的には自由」なのである。

ここで再びわれわれはホワイトヘッドの極めて徹底的な形而上学的思索に出会うのである。すでに述べたように、自己形成とは、さまざまな永遠的客体の形で表象せられる多くの条件を、一つの全体に統一する働きである。自己形成は多くの永遠的客体を或る複合的形相へ、言い換えれば、複合的「永遠的客体」へ、統一することである。このことは永遠的客体の或るものを、その時実現される感受の型にかかわりあるものとして摂り入れ、他の永遠的客体を捨てる、ということを意味する。この働きをホワイトヘッドは、現実的存在の「心的極」(mental pole)に属せしめる。一々の現実的存在は、永遠的客体に対して能動的に働きかける限りにおいて、心的である。これに対し、一つの現実的存在の「物的極」(physical pole)とは、それの受容的側面のことであり、他の現実的存在がそれに及ぼす影響のことである。ところで自然における「秩序」は本質的に心性の働きである。すなわち、何らかの構造、言い換えれば永遠的客体（いかに複合的であろうとも）は、「心的極」において実現されるのである。*

＊　一九三七年四月十五日の講義。

「すべての現実的存在にはこの心的極が内在している。無機の世界にもそういう心的極があるということを理由づける唯一の事実は、無機の世界が合理的理論によって捉えうるということである。そしてまた、もし無機の世界にも心的極を仮定するのでなければ、われわれが再び物質と精神との根本的な相違を認めざるを得ぬはめに陥るであろうということである。

ホワイトヘッドは、かれの体系の基本要素すなわちモナドに（ライプニッツに倣って）心性の微小量をもたせるに当って、既に注意したように自然の「二元分裂」（bifurcation）の問題を念頭にもっていたのである。この問題に対するかれの解答は、自然の構成要素に心的側面と物的側面の双方を持たせるということである。これらの単位が複合されて「社会」（society）となるとき、それから心性が支配的特徴として出現しうる（高等動物と人間とに見られるように）。けれども心性は普通の「物的対象」のうちにも存在するのである。およそ存在するということは、或る形相をもつということであるが、一つの形相をもつことは、すでに心的極を予想することである。

ホワイトヘッドは現実的存在の「心的極」を自己選択的すなわち自己制限的なものと考えている。こういう考えの背後にある理由は、部分的には、一々の現実的存在が他のすべての現実的存在に関係をもつという考え方である。そこで、一々の現実的存在を条件づけている無数の影響は或る特殊な構造へ、いわば「切りつめられる」ことになる。かくて各々の現実的存在は一定の形相を実現し、その形相は一つの「歴史的径路」の全体にわたって繰り返されうるのである。現実的存在とそれらの複合体とは、非常に多くの、しかし限られた数の、永遠的客体を例示する。そこで現存の宇宙は、存在し得たであろうものの或る限られた表現、にすぎないのである。

さて現実的存在の一つの複合体すなわち「社会」は、その成員である各々の現実的存在が他の成員と共に一定の形相すなわち構造を共有する場合に、成立する、とホワイトヘッドは考えている。言い換えれば、ある数の現実的存在が同一の支配的形相を継承するとき、一つの「社会」がつくり出されるのである。ある特定の現実的存在が一つの

「社会」の成員となることは、同様な構造をもつ他の現実的存在からなる一つの環境をもち、その環境に因果的に依存する、ということである。この説をもっと積極的な言葉で言い直すと、構成単位となっている現実的存在の各々が一つの共通な本質的特徴を能動的にわがものとするとき、一つの「社会」がつくり出される、のである。ホワイトヘッドはこれを、より高い水準の秩序、多くの現実的存在の集合のもつ秩序、と呼んでいる。この一般的な考え方が、物質の基本的な組織から極めて複雑な有機体にいたるまでの、すべての「社会」にあてはまるのである。この意味の「秩序」は、自然全体を貫いている。そして単に「秩序」と言うに留まらず、自然の「法則」が支配する場合には、構成要素である個々の現実的存在の、与えられた形相に対する順応は、殆んど完全なるものになっている。しかしまた、他の例では、法則は統計的な一般化という形をとっている。この場合には、ホワイトヘッドの解釈によると、「社会」の支配的形相がそれの構成要素のうちにただ単に統計的にのみ存在するのである。*

＊『過程と実在』一五〇頁。
ホワイトヘッドは自然における「秩序」が統計的であるという考えを度々強く主張している。かれは幾何学の示すような相互関係が統計的な優勢以上のものであるかどうか、という問いをすら発している（一九三六年十月二十二日の講義）。それゆえ社会とは、より厳密に言えば、各々の現実的存在が同じ形相を統計的に共有している場合に、そのような現実的存在の集合を意味するのである。しかしこの場合、どの程度の「頻度」が要求せられるかは全く未決定のままに置かれている。恐らくホワイトヘッドはこの点に弾力性を持たせたままにしておくつもりであったのだろう。

現実的存在と、現実的存在から成る「社会」とが、実在界を構成している。そして自然の存在者の段階組織が、われわれのいままで見て来た範囲においては、自然の「秩序」の唯一の源である。しかしながら、このことの背後には一つの主題が横たわっていて、それは時々『過程と実在』の本文のうちで論議せられて居り、ホワイトヘッドの自然の観念にふくまれている「秩序」という考えを論ずるにあたっては顧みざるをえないものである。それは「神」とい

う主題である。神は自然における限定の源であって、一つの根本的な理由によりホワイトヘッドの形而上学において必要なものである。すでに述べたことであるが、諸々の永遠的客体は、それら自体としてみれば、現実に自然を特徴づけることもありうるところの、あらゆる可能な形相の国をつくっている。そこでたとえば空間的時間的連続は、現にこの世界であるのとは、違った姿でありうるであろうし、元素表に現われる原子の種類の数は、現在の世界におけるよりも少くも多くもありうるであろう。しかしながら永遠的客体は、プラトン的形相が存在するようには、存在するのではない。永遠的客体は、ある現実的存在と結合してのみ存在するのである。そこでホワイトヘッドは、極めて特殊な種類の一つの現実的存在を要請し、その現実的存在の中であらゆる永遠的客体が、自然において実現されている場合もおらない場合も、いずれの場合にも、観念的客体として存在する、と考えるのである。これが神の「原始的本性」(Primordial Nature) である。

以前にこの主題を論じたとき(『科学と近代世界』第十一章)には、ホワイトヘッドは神を「限定の原理」(Principle of Limitation) と呼んだ。そこでのかれの議論によると、現在の宇宙は「論理と因果性との一般的関係」に従っているが、そうでないこともありえたのである。かれはこのとき、論理的な限定またはその他の形式的な限定を欠いた「不分明な多様の世界」(indiscriminate modal pluralism) の可能性を考えている(『科学と近代世界』二五六頁)。そこで世界が或る形式的な条件に従うということは、或る根拠すなわち限定の原理を要することになる。その原理はまた選択の原理といってもよいであろう。ところでこの場合、ホワイトヘッドがこの原理を「神」と名づけたのでなかったならば、かれのこの議論は、あらゆる可能な世界を支配する究極的な公式乃至は法則、という考えを暗示したかも知れない。

『過程と実在』においては、神は明らかに一つの現実的存在(特殊な種類の)であるといわれている。すなわちホワイトヘッドのいわゆる存在論的原理(「存在するとは現実的存在であることである」)が守られているのである。極め

て特殊な種類の一つの現実的存在を想定しなければ、世界の中で実現されていないところの永遠的客体は、現存の秩序にとって「相対的に非存在的」(relatively non-existent) となるであろう(『過程と実在』四六頁)。すなわち、永遠的客体がたとい世界のうちで実現されていない場合でも「現実的関連」(effective relevance) をもつためには、それら永遠的客体がこの世界の中に或る作用主体によって存在する、ということが必要なのである。或る永遠的客体が現在の宇宙から排除されるということは、それ自身一つの関係すなわち否定的関係なのであるが、上に述べられた「相対的に非存在的」という句は、現実的 (effective) 存在を持たぬことを意味する、と解釈してよいであろう。排除された永遠的客体に対して、現実的存在の現存の秩序への、現実的肯定的関係を附与するところの、一つの作用主体がなければ、この世界で新たなことは、何も生じ得ないであろう。多くの現実的存在の中の一つの現実的存在としての神が、そのことを果すのである。神は、現実世界のうちに実現されている永遠的客体の体系と、実現されなかった永遠的客体との、いずれをも心に概念として持つのである。そこで、実現されなかった諸々の永遠的客体は、現にあるものへの「等級づけられた関連」(graded relevance) において、神によって思い浮べられているのである。このことは、形相が自然の中で実際に新たに出現するのだということを、われわれが想い起こすならば、もう少し明らかになるであろう。諸々の形相は、或る複合的な条件がすでに実現されている場合にのみ、自然のうちに出現する。けれども、それら形相は、その条件から因果的に派生したのではない。諸々の条件は、何か新たな形相の到来をただ可能にするだけである。しかしながら、だからといって、そのように出現する形相が、無から飛び出すわけではない。それら形相は、自然の秩序のうちに現に実現されている諸条件に対する「等級づけられた関連」のうちに、存在しているのである。神は、現にあるところのものと、そして、現にあるところのものとの関係において新たに出現しうるものとの両者を、心に思うわけである。*この神の思いが、ホワイトヘッドの宇宙における「秩序」の究極的源泉なのである。

＊　一九三七年五月四日の講義

「不変の秩序を維持する一つの無限者あるいは秩序の流動の背後にあるところの無限者が、（自然の中で突然に出現する秩序に関して）考えられている。しかしながら、そういう無限者は、一つの理想が何故現実に実現されるかという理由を与えない。そういう理由を与えるものは、当の世界時代に関連をもつ限りでの神なのである」。

この説の背後には明らかに、抽象的知識に関するホワイトヘッドの考え方が横たわっている。それは特に論理学と数学とに表現されるような抽象的知識であって、現実への既知の適用における既知の例示のいかなるものをも遙かに越えているのである。ホワイトヘッドはこういう種類の抽象的知識を、現実的存在がもちうるところの可能的形相と考える。このような見地からは、形式的諸原理のどの範囲が出来事に関連をもつかについても又、或る程度の任意性があるわけである。ところでホワイトヘッドはかれの合理主義に従い、この点に対しても一つの理由がある筈だ、すなわち、選択または「具体化」(concretion) の何らかの原理がある筈だ、と主張したのである。そしてこの原理を越えてさらに説明原理を求めることはもはや出来ない、ということが、かれがそれを「神」と呼ぶ理由の一部なのである。そのような原理が、究極的原理であるという意味以上に、如何にして宗教の神でありうるかは、直ちに明らかだとは言えない。（ホワイトヘッド自身も同じ疑問をアリストテレスの神に対して発しているのである『科学と近代世界』二四九頁）。

さてわれわれは、この主題を暫くおいて、もろもろの現実的存在のつくる「社会」(society) についてのホワイトヘッドの考えを、更に詳しく吟味することにしよう。すでに見たように「社会」とは多くの現実的存在から成る一つの結合体 (nexus) であって、一つの共通な本質的特徴乃至はそういう特徴の組によって、多少の程度において支配されているもの、なのである。「社会」は二つの大きな類に分れる。すなわち、「無生の社会」と「生きた社会」とである。この分類をホワイトヘッドは相対的なものと考えている。生きた社会と無生の社会との間には根本的な分離

は存在しない。その差は単に程度の問題なのである（『過程と実在』一五六頁）。

ある見地からすると、現実的存在のつくるもろもろの社会の秩序に関するホワイトヘッドの考えは、多くの結合体の段階組織という考えだと言えるであろう。そこで「分子」は現実的存在から成る社会であり、それはまた「細胞」の下位社会（subsociety）である。細胞はまた一層複雑な有機体の中の下位社会であるような社会である。このような段階組織を考える基礎は、われわれがすでに知っているように、各現実的存在が二極（物的極と心的極）をもつこと、および、現実的存在を支配する「諸条件」言い換えれば「範疇的諸制約」（categoreal obligations）である。*この点で二種の条件（言い換えれば範疇）が特に関わりをもっている。両方とも「心的極」を支配する。すなわち、与えられた結合体の成員のもつ観念的側面を支配するのである。第一種の制約の下では、永遠的客体は、物的極をいわば反映するものとなる。「観念的極」のこの機能は「観念的確定の範疇」（category of conceptual valuation）と呼ばれる条件に従っているのである。たとえば一つの結合体のもろもろの成員が、一つの永遠的客体（複雑であってもよい）を反映するとき、この範疇に従っているのである。この範疇への従属を示す例は普通の「物的対象」である。

＊　一九三七年三月二十日（？）の講義
「形而上学の究極原理は歴史とは独立に適用される。それらは永遠的客体のもつ根本的性格をもっている。形而上学的必然性はそれが或る時間点への関係を示さぬものである点において、永遠的客体に属する」。

第二種の範疇的制約は二つある。すなわち、「観念的逆転の範疇」（category of conceptual reversion）と、「変形の範疇」（category of transmutation）と、である。この二つの条件の下においては、結合体の成員のすくなくとも或るものは、その複合体の永遠的客体を単に反映するだけではない。この場合には当の現実的存在の心的極において或る程度の自発的な反応があるのである。もろもろの成員の間には相互調整があると言ってよい。そして結合体を全体としてみるとき環境に対する新たな反応があると言ってよい。このような形の創造的反応は、生きた細胞の特徴を

なすものである。そこで、その結果「その社会全体を通じて自己保存的反応が存在する」(『過程と実在』一五六頁)のである。つまり、一つの社会における「生命」は、その社会の構成要素の或るものによって、「観念的逆転の範疇」と「変形の範疇」とに従って生み出されるところの派生的な結果なのである。

これら二つの範疇は、結合体の創造的側面を支配する。第一の範疇は或る種の影響を「逆転」すなわち排斥することによって否定的に(否定的把握)。第二の範疇は新たな形式の反応によって肯定的に。後の方の場合には、具体化の生起の一々は、環境の新しさに対処するために、新しさをつくり出す(『過程と実在』一五五頁)。この二重の適応過程が、あらゆる形式の生命(従って究極的には人間の心性)の基礎であるが、もっとも単純な段階においては「感覚的強調による無意識な適応」(thoughtless adjustment of aesthetic emphasis)として現われる(『過程と実在』一五五頁)。

われわれはホワイトヘッドに従って「社会」を「生きた社会」と「無生の社会」とに分けた。しかしこの際、大切な断り書きをしておかねばならない。ホワイトヘッドは、複合的な有機体を、構造を持つ社会(structured society)と考えている。そこですでに見たように、それは、「有機的結合体」(organic nexus)と同様に「無機的結合体」(inorganic nexus)をも含むところの、さまざまな形式の結合体から、構成せられていることになる。有機的結合体は、それを構成する結合体の或るものが、心的極に基づくとわれわれの認めた創造的衝動を実現している場合に、存在するのである。この場合、さまざまな無生の結合体によって支えられている一つの「完全に生きている」(entirely living)結合体があるのである。この「完全に生きている」結合体は、微妙な均衡によって成立している「機構」(mechanism)であって、それ自身は一つの社会を構成しているのではない、と言ってよいであろう。この考えは、本質的に、有機的結合体が「永続的な魂」(enduring soul)をもつものではない、ということである。もし生命が真に一つの「社会」であるならば、それはそれ自身一つの永続的な客体として存在しうるであろうが、事実は、生命は

ただ他の結合体と結びついてのみ存在しうることが知られているのである。別の言葉で言うと、生命は、主として「心性」すなわち観念的な改新の働きの側面、に基づいているのである。

かくてホワイトヘッドの考えるような生命は、それの存在のために現実的存在の相当に安定した社会を必要とする、ということが注意されねばならない。生命は分子的且つ化学的諸条件に依存するのである。しかし、そういう諸条件が、「完全に生きている」結合体を可能にし、この「完全に生きている」結合体が、それを含む構造全体に、順応と適応との能力を与えることになるのである。このような場合にホワイトヘッドはその「完全に生きている結合体」を、複合的構造の中での「支配的」(regnant) 結合体と呼んでいる。そして一層複雑な場合、たとえば人間の場合にも、同じ一般的諸条件があてはまる。意識と思考とについてのホワイトヘッドの議論のさまざまな側面については、後の章において述べるであろう。

ホワイトヘッドは言う、『「生命」は一つのきまった特質ではありえない。それは独自性 (originality) を指す名である』(『過程と実在』一七〇頁)。この言明をよい手引きにしてわれわれは、ホワイトヘッドの形而上学の背景の細部に埋没していることが多いがしかしそれでも根本的な意味をもつところの、一つの主題に到達する。それは、宇宙において新たなものの創造への全般的な傾向が存在し、この傾向は自然において次第に複雑な構造*が生まれることを理由づけている、というホワイトヘッドの確信である。この事実は、時には、経験の強度の増大への衝動、あるいは「満足」への衝動、というふうに言い表わされている。有機体の場合に、現に示されている経験の強度および多様性は、その有機体の含む「完全に生きている結合体」によって可能となったものである。けれどもこの「支配的」な生きた結合体はまた、その複合的有機体における経験の、新たな多様と強度をも、可能にするのである。そういう新たな多様と強度とは、つまらない無意味なものであるかも知れず、「悪い」ものでさえあるかも知れぬが、しかしその新たな経験の形式が存在者の比較的恒常な特徴となることもありうるのである。

＊　自然における“nexus”についてのアレクサンダーの考えを参照。

改新へのこの傾向は勿論、一つの特殊な結合（「完全に生きている」結合体）を形成している若干の現実的存在に依存する。しかしながら、そういう結合体が実現するところの様々な形式の「経験」は、単に当の現実的存在だけが生みだすものなのではない。他面においてそれは、宇宙の中で多くの永遠的客体が、現実の自然の秩序に対する実在的可能性として、いわば重要視せられているが故に、生じたものなのである。これは、ホワイトヘッドが「神」の役割と考えているところのものを、示している。神は、「完全に生きている」結合体の内部に、経験と「価値」との新たな多様と強度とを呼び起こすのである。

第五章

われわれは今や「象徴的指示」の問題（『過程と実在』第二部第八章）についてのホワイトヘッドの所論に注意を向けよう。それは、われわれがすでに手がけた哲学的原理の或るものを見直すためにも、また、われわれがその名を挙げる以上に出なかったいくつかの概念の分析をすすめるためにも、役立つであろう。ホワイトヘッドがかれ自身の哲学的考察の方向を転じつつ発した極めて適切な言葉にあるように、「道に迷った旅人は自分がどこに居るかと尋ねるべきではない。かれが本当に知りたいのは他の場所がどこにあるのかということなのである」（『過程と実在』二五九頁）。われわれが今や見つけ出さねばならぬのは「他の場所」なのである。

そういう一見見なれた場所の第一のものは「知覚」である。そして特に知覚を「印象」と「観念」とによって考えようとしたヒュームの説である。ホワイトヘッドのよく用いる句、「表象の直接態」は、人間という複雑な水準において考えると、印象についてのヒュームの説に密接に対応している。更に、「表象の直接態」のこのような特殊化された形態のもとにある原型を、ホワイトヘッドは自然のもっとも単純な諸要素の間に、「把握」という形で見出して

いる、ということをわれわれはすでに見た。そしてそういうホワイトヘッドの考えの理由もすでにわれらのよく知るところである。すなわち、多くの現実的存在からなる複合物は、一々の要素としての現実的存在のうちにすでに現われている特徴のみを、示しうる、ということである。そして意識的な知覚経験の水準においては「表象の直接態」は「感覚的経験*」に等しいのである。

＊　感覚的知覚がホワイトヘッドの哲学の出発点でないことを絶えず念頭におかねばならない。「私は感覚経験から出発するのでなく、また意識から出発するのでもない。そういう所から出発する事は充分に根本的とは言えない。それにまた進化の過程を眺めれば感覚器官が稀なものであることは明らかである。」（一九三七年三月二十日講義）

「表象の直接態」には前に述べたところでは「因果的効果」（causal efficacy）が対立するのであったが、この「因果的効果」もまた、全体として考えられた知覚状況の他の側面なのである。「因果的効果」の相における知覚は、われわれに時間の意識を与え、「表象の直接態」の相における知覚は、われわれに空間の意識を与える、と言ってよいかも知れない。この考えは、厳格に言えば、ホワイトヘッドの説のとおりではないのだが、しかし、知覚の二つの側面の間に存する本質的な対比を、特に視覚作用におけるそれを示しているのである。すなわち、視覚はわれわれに空間の多様を与え、これは鮮かに目に映るが、それに比して不明瞭なのは、見られた空間が環境の因果作用の結果であるという意識である。しかし、ともかくも、視覚内容は眼から由来するものとして経験されている。そこでホワイトヘッドは「身体はあらゆる象徴的指示のもとにある大きな中心的な基礎である」（『過程と実在』二五八頁）と結論している。見ることを眼と結びつけるのは既に一つの対象の指示である。何故なら、身体はもっとも直接な環境にほかならないから。一つの灰色の石を見ることも、それと根本的に異なったことでない。

さて把握の関係が常に何等かの永遠的客体の形相の下で成り立っということを、ここで想い出すならば、もっとも単純な形における象徴的指示とは、ある現実的存在のうちに宿っている一つの永遠的客体を、それの因果的派生の源

へ関係づけることだ、ということになるであろう。直接の現在のうちに（一つの現実的存在の形相として）宿っている永遠的客体は、それに先き立つ一つの「歴史的径路」から派生したものでありうるのであり、その歴史的径路においてはその永遠的客体が、現実存在の感受のうちに繰り返えし現われた性格だったことがありうるのである。このような場合には、象徴的指示は単純かつ直接なものだと言ってよい。それはホワイトヘッドが時に、感受の「再現」(re-enactment)と呼んでいるものである。* 言い換えれば、この場合「心的極」が「物的極」に従っているのである。そして「心的極」と「物的極」とは、一つの単純な具体化の出来事の二面であるのだから、象徴的指示は二元的なものでなく、指示関係を含む単一な全体である。しかし、この基本的な状況は「物的極」と「心的極」とによって示される二つの要素が生み出す非常に複雑な関係を容れうるのである。

* 『過程と実在』三六二頁。なお一九三七年三月十七日の講義でかれはいった、「最も低い水準における観念的極の働きは、単なる繰返しである」。

「物的極」は、現実的存在が他から因果的に規定される側面である。それは現実的存在を環境に関係させる、すなわち、その現実的存在が依存する複合的過去に関係させる。この環境は空間的時間的秩序の全体であるが、しかし、その一部分のみが直接にその現実的存在に関わりをもつのである。しかしその現実的存在に関わりをもつ過去は、多くの現実的存在の極めて複雑な結合体と、その結合体の直接の環境とでありうる。たとえば、一つの有機体とそれの存在に必要な諸条件とでありうる。そこで、有機体のうちにある一つの特殊な器官の、他から承け継いだ構造は、一部はその器官が全有機体のうちで果たす機能に由来し、一部は、或る特殊な器官としてのそれの本質的性格に由来する。

さてここで「把握」の理論を想い起こすことが必要である。というのは「象徴的指示」の関係は、一つの「感受」であり、一つの現実的存在のうちなる感覚活動だからである。「心的極」は「物的」受容の内容に反応するものと考えられねばならないのである。こういう考えの背後にある理由はさきまわりして簡単に述べておくべきであろう。と

いうのは、それはホワイトヘッドの知識理論のあらゆる点にあらわれている考えだからである。ホワイトヘッドの哲学的思索は人間のあり方というものからしばしば遥かにかけ離れたところを行くように見えるが、しかし、それは人間経験の広い範囲を明瞭にしようと企てているのである。人間は「理性的動物」であるというアリストテレスの説にホワイトヘッドが反対して立てた主張、すなわち、人間は理性的である前に感情的感覚的な存在であるという主張は、感受の理論において形而上学的解釈を与えられている。その理論は、もろもろの観念が、知識の対象となる前に、まず何よりも感情的で、いわば興味をそそるものなのだ、というホワイトヘッドの見解のうちに要約されている。理論的対象は、真または偽である前に、まず、「心に抱かれる」(entertained) のである。それらは高度に特殊化された感受形式の対象なのである。*

* この見地から見て重要な意味をもつのは、ホワイヘッドの自然についての考え、すなわち、存在についての「想像的一般化」としてのかれの形而上学が、真または偽である前に人の興味をそそるものである、ということである。観念の一つの体系の「意義」は、この点から見ると何よりも、その思想が「人を動かす力」を内にもっている、という意味に理解されねばならない。ホワイトヘッドの著書の標題『思想の冒険』は、この主張の明らかな反映である。思想と社会制度との歴史についてのこの解釈は、思想の真理性や正当性の考えによってよりも、上のような一般的な考慮によって導かれている。

同じような考慮が「抽象概念」の説にも向けられている。これは前にわれわれも触れたことである。一つの抽象概念すなわち理論的対象は、蔭に隠れたさまざまな感受（それらが有機体の状況全体を形づくる）を背景として際立たされた、高度に特殊化された感受の形式である。抽象概念とは、ホワイトヘッドの考えでは、情緒と感情の背景からいわば採り上げられた稀な出来事なのである。ある形式の感受を識別して意識的に筋を立てて記述することは、その他にも多くの感受が知的注意の対象たりえたであろうことを考え合わせると、常に任意的である。識別はしばしば実際的な考慮によって命ぜられる。識別されえたであろうものであって識別されなかったものが、他にも多くあるので

ある。われわれの身体のうちに反映しているところの、自然の巨大な背景は、何らかの特殊な意識的「思想」によっては大部分無視せられているのである。*

* あれやこれやの抽象概念を扱うことによってわれわれは単純性をもとめているのである。しかしその際、その単純化を重要なものと見えしめるところの、ある背景をわれわれは常に前提している。一九三七年三月二六日（?）の講義。

意識的知覚は「判断のもっとも原始的な形式」である、とホワイトヘッドは言う（『過程と実在』二四五頁）。その意味は、たとえば「この石は灰色である」が、他のすべての色とわかたれたものとしての「灰色」を含むところの意識的な識別である、ということである。「任意のもの」(any) ではなくて、「このもの」(this) が問題なのである。ところでこのような識別は、この灰色が、石から眼に到る複合的な「径路」(route) のうちにある先行諸条件を指示するものである、と感ぜられているということに基づいている。「灰色」はこの径路から、いわば継承された、一つの「永遠的客体」なのである、灰色が知覚者の状況のうちに現存することは、この径路に依存していて、従って灰色が「真に」その石の色でありうるとともに、また、そうでないこともありうるのである。正常な場合においては石の色は真実なものである。しかし、だからといってその色は知覚者を離れて、あるいはまた歴史的径路を離れて、存在するわけではない。知覚者と径路との二つを前提した上で正常な状況の下では石は灰色なのである。石は、知覚状況においてそれを特徴づける他の多数の性質とともに、灰色である、と感ぜられているのである。そこで「この灰色の石」(this stone as grey) の意識的知覚は、二つのことを示している。第一に、それは識別により一つの特殊な色を、その指示物なる石に属せしめている。第二に、「石」は因果的派生の感覚（継承された径路の因果的効果）を指示し、*「灰色」は表象の直接態のもつ性格である。このようにして「象徴的指示」が主語と述語とを与え、それらは（理解の水準が高まれば）「この石は灰色である」という判断に言い表わされるのである。主語と述語との二つの要素は、いずれも一つの知覚という出来事のうちに含まれている。

＊『過程と実在』二六一頁。
ホワイトヘッドの言うところでは、「石」は「主として」歴史的経路を指示するのである。何故なら「因果的効果」と「表象の直接態」との区別は相対的なものにすぎないからである。「これら二つの様態は同一の所与を、強調の仕方を違えて表現しているのである」（二六二頁）。

ここで伝統的な問い、すなわち、その石は「客観的に」灰色なのか、という問いを発するならば、答えは、「然り」であるとともに「否」である。「石が灰色である」のは、この知覚の状況においてそうなのである。けれども、この状況は多数の現実的存在のつくる歴史的径路全体（この径路全体が「石」なのである）を含んでいる。そこで石は、独立に考えられたその歴史に所属するいろいろな特性（言い換えれば永遠的客体）をもっている。こういう石そのものの特性と、複合的な有機体としての人間のさまざまな特性とを合わせたものが、知覚者によって感ぜられ更には意識によって識別されるところの灰色、を成立させているのである。この複合的事態を離れて、「石が灰色である」ということは無意味なのである。すべての性質は、等しく継承の過程に依存するものであり、且つ、知覚の過程が正常であるとすれば、人間的水準において経験された自然の性質としてすべての性質は等しく実在的なのである。それ故、経験において「第一次的」性質と「第二次的」性質との差はない。この意味において、経験においてあらわにされている諸性質が、そのまま世界そのものなのである。美や価値の形相は、感覚の形相と全く同様に「与えられたもの」なのである。この基礎の上に立ってホワイトヘッドはみずからの主張を「根本的に」経験的であり、反二元論的であると考えている。自然はあらわにせられているとおりの姿で存在するのだが、それをあらわにすることそのことは、つねに、知覚状況における或るものを特徴づけるところの何らかの永遠的客体の感受なのである。*

＊　後の議論でわれわれは、今までとり上げなかった点の考慮をもしつつ、ホワイトヘッドの理論を尚一層正確に再び述べることが出来るであろう。

ホワイトヘッドはあるとき自分は「暫定的な実在論者」(provisional realist) だと言った(『科学と近代世界』一三二頁)。この言葉は、第一次的性質と第二次的性質の区別、および、「単純な位置づけの誤謬」(fallacy of simple location)、を論じている場合に発せられたものである。対象の諸性質と経験の諸性質とが別々にあるのではない。そのように単純な位置づけをもった性質があるのではない。性質はつねに、「知覚者(それの特殊な場合が知覚者としての人間である)」との連関においてある。石に空間的位置を帰することと、色を帰することは、いずれも或る知覚作用の中心からの展望によって成り立つことがらである。いずれも知覚者を必要条件としているのである。従って対象と知覚者との連関が、「実在」だということになる。ホワイトヘッドの認識論において暫定的実在論とはまさにこのことを意味する。

現実的生起の創造的側面すなわち「心的極」は、ホワイトヘッドの知覚についての見解において特に重要な意味をもっている。「物的極」の与える「所与」は複雑多様であり、その要素の一々が、環境から継承されたものであることを反映している。知覚の所与の一つである灰色は、重さや空間的形態等の如き非常に多くの他の所与の中の一つの所与なのである。しかし、石が特に灰色と見られているとき、そのことは何を意味するか。ホワイトヘッドは範疇的制約第六*に従い、「心的極」が所与の一つである「灰色」を「石」の特徴に「変形し」、いわば、他の様々な所与を抑圧するのだ、と考えている。そこで新たな所与「この灰色の石」が存在するわけである。「心的極」はこのように多くの所与を単純化して一つの性質の形に化することができるのである。知覚は、身体を通じて継承される所与の複雑さに対する高度に選択的な変形機能である。知覚はライプニッツの解釈したように「混乱している」のではない。それは受けとられた所与に対して独特な仕方で選択的なのである。(知覚のこのような性格は、知的過程の水準における抽象についての、ホワイトヘッドの理論を予示している)。

* 『過程と実在』三六二頁。「変形された感受のみが意識に達する。」

ホワイトヘッドは、「表象の直接態」と「因果的効果」とが象徴的指示において果す役割を示す例を、言語の用法から採っている。かれの指摘によると、一般に形容詞的な語はものを「表象の直接態」の様態において表現し、名詞的な語はものを「因果的効果」の様態において表現する。「この灰色の石」という句は、上の二つの要素が知覚者の経験のうちに生起しているのを、反映しているのである。結局ホワイトヘッドは次のように要約する。『かくて、意識的判断について言えば、象徴的指示とは、「直接態」の様態における知覚の事実を、「因果的効果」の様態における不明瞭な知覚内容の位置づけと識別のための根拠として、とり上げることである』（『過程と実在』二七二頁）。言語はこの区別を反映し、「象徴的指示」と呼ばれる感覚の混合様式は、知覚において表現されうるのである。

しかしながら、知覚判断は、象徴的指示の更に基本的な諸形式に比べると、高度に特殊化された出来事である。われわれは今や一層基本的な形式にいくらかの顧慮を与えねばならぬ。但しこの主題は複雑であるから予備的な考慮であるほかはないが。まず第一にわれわれは一つの現実的存在（あるいは多くの現実的存在の複合体）の基本的構造を想い起こすことにする。それは上述の二つの知覚様態の下に受け取られた様々な外的影響と、想像しうるもっとも低い型の現実的存在においてのことであるが、主体の側における「順応的な」(conformal) 感受とから構成されている。こういう低い段階の場合における「主体」は「未発達あるいは全く無視しうるもの」(“Symbolism, its Meaning and Effect” p. 23. Putnam Capricorn Books) である。しかしながら、大多数の物的対象の水準においてすでに、ホワイトヘッドの主張によれば、主体の側に、所与に対するそれの反応（感受）において、ある程度の「非順応」(non-conformity) の現われがある。たとえばホワイトヘッドの言うところでは、対象における「震動」(vibration) は、その対象を構成している多くの現実的存在の順応的感受のうちに変動が起こっていることを示している。もっともその全体としての結果は、一つの形式における順応の様々な変容にほかならないが。有機的生命の水準においては、より複雑な有機体のほうに進むに従い、主体の非順応的な感受はいよいよ際立って来る。「非順応的感受」とは「改新」

にほかならない。そこでたとえば生長は、過程を支配しかつ外からの所与のあるものにかかわることを拒むところの「主体的目的」の存在を示していると解釈される。一つの有機体が自分に不適当な環境を避けあるいは逃れる場合のごとくである。そしてこの場合には、「あれでなくこれである」という、感知された対比（すなわち対立）がある。これは意識の有機的「胚種」である。但しまだ有機的な反応にとどまる。しかし、経験における対比や同一性が、そのものとして感受されることになると、意識が存在するに到るわけである。*

＊『過程と実在』二八四頁、三七一―二頁。こういう型の感受は、常に「命題」を含んでいる。このことはこの章および後の諸章においていくつかの違った仕方で検討されるであろう。

そのような対比は、有機的複合が進み、主体が物的に受け入れられた内容に対して心的創意をもって反応するにいたった水準において現われる。主体は、一つの永遠的客体と受容した所与との間の対比、または類似、を感受する。そして永遠的客体が心に抱かれる時、それは嫌悪あるいは快感その他の感情をもってでありうる。こういう関係にあるところの永遠的客体、すなわち或る事態にかかわりをもつものとして感受された永遠的客体が、「命題の感受」(propositional feeling) である。一つの命題とは或る仕方で環境にかかわりあるものとして「心に抱かれた」永遠的客体である。命題が真あるいは偽であることは、命題の第一次的機能ではない。一つの命題は、存在するところのものとは反対に、欲求せられた事態であることができ、従って行動を導くことができる。命題はまた、未来に対する恐れという情緒的形式において、一つの可能性を表現することができる。またそれは、現在の事実を遠く離れた可能性として、ただ面白いというだけのものでありうる。かくて、「命題の第一次的機能は、感受に対する誘いとしての働きをもつことである」（『過程と実在』三七頁）。一つの命題は「意識への受容」(entertainment) のもつ無数の異なった連関に入り込むことができるのである。

命題は、現実的存在とも永遠的客体とも異なった新たな型の存在である。この意味で命題は「不純」(impure) であ

り、他の二つの存在論的要素に依存している。命題は現実的存在の一つの結合体において感受の一形式として存在するのであるから、通常すくなくとも一つの「論理的主語」(logical subject) 言い換えれば「現実世界」(actual world) すなわち与えられ受容された世界を、もっている。そこで一つの命題は一つの主体の感受のうちに抱かれており、その感受はその命題と論理的主語とのいずれをも含むのである。

判断とは、「物的極」のもつ所与と「心的極」のもつ命題との間の対比についての、「知的」感受である。知的感受すなわち判断には二つの形式がある。(1)直観的判断。これにおいて命題が「物的極」の内容と直接に且つ細部にわたって比較せられている。この比較は「正しい」(correct) 判断を生む。* (2)派生的判断。この判断の含む命題は何よりもまず或る前提から論理的に導出せられたものと見られている。しかし或る論理的主語へのかかわりもやはり前提せられている。そしてこの論理的主語は、「物的極」に明確に「与えられている」のではないような、多くの現実的存在から成る、広い一般的な背景でもありうるのである。そこですべての命題は、たとえそれが遠い前提から論理的技巧によって導出せられた命題であっても、現実世界に前提せられている何らかの論理的主語の故に、意味をもつのである、とホワイトヘッドは主張する。すべての命題は、たとい心に想像された命題であっても、ある現実を前提している、たとえその現実が実際何であるかは、しばらく不定のままに置かれても。(この一般的な主張に対する充分な説明は、後の議論に譲らねばならぬ。)

* この言い方は、いくらか制限を受ける。『過程と実在』四一四―五頁参照。

さて命題に関するこのホワイトヘッドの説には、言語の批判、すなわち言語が意味を表現するに当って示す制限についての批判が、添えられている。「言葉による言明は決して命題を充分に表現することが出来ない」(『過程と実在』二九三頁)。ホワイトヘッド自身の例を用いると、「ケーザルはルビコンを渡った」という言明は、その外的形式により、相異なる多くの意味、あるいは相異なる多くの命題を、反映することができない。多くの意味や命題は、一つの

言語的な表現によって、いわば覆われているのである。こういう事態の生ずる理由は、一見単純な言明が知的感受において、多くの異なる論理的主語に関係づけられうる、ということにある。このことは異なった意味のさまざまな段階を示す多くの命題の一系列を生むが、単純な言語形式はそれらを認知することができないのである。「ケーザルはルビコンを渡った」は、事実上多くの違ったことがらを意味する。その情景の観察者には或る一つのことを、また、二十年後の観察者にはまた他のことを、等々を意味する。すなわち、「細かな段階的相違を示す無数の極めて特殊な命題が提出されうる」のである。言語的表現は、このような変動を認知できず、特に命題の意味を変ずるところの、存在論的状況の変化、を認知できない。「ケーザルはルビコンを渡った」の「唯一の意味」(the meaning) というものはないのである。*

* ここで「多くの意味の家族的類似」についてのウィットゲンシュタインの説が想い起こされる。ウィットゲンシュタインがこの考えに、言語の用法をもとにして到達しているのに対し、ホワイトヘッドがすくなくとも通常は、言語が意味の多様を反映しえないという点を強調していることは、興味ある対比である。ホワイトヘッドは、或る言語的表現が一定不変な意味をもち、それは真あるいは偽である、という通常の想定を問題視したのである。

この考慮から、ホワイトヘッドの「抽象概念に対する批判」も部分的に帰結する。すなわち、無数の命題が同一の事実に対して有意味なのであり、それら命題の一つを選ぶことは、常に或る程度まで任意的な選択である。同じ事実の可能な解釈として心に容れられうる他の多くの命題が存在するのである。このことに対する存在論的理由は、事実そのものが常に或る「観察者」の展望に相対的に存在する、ということなのである。ホワイトヘッドの世界には、事実そのものは (facts as such) 存在しないのである。

第六章

永遠的客体の説がホワイトヘッドの形而上学において中心的な位置を占めることは、前の諸章によって明らかである。かれ自身の言葉で言えば、「現実的存在と永遠的客体は何かきわめて決定的なものであるという印象を与える」（『過程と実在』二三頁）。永遠的客体の説は、かれの初期の著書にすでに述べられていた。たとえば『自然の概念』における「客体」の説のごときである。しかし、その説に十分な形而上学的な解釈をホワイトヘッドが施しているのは『過程と実在』においてである。* まず第一に、永遠的客体が自然において例示されるというホワイトヘッドの考えを思い起こそう。そういうふうに例示されたものとしては、永遠的客体は出来事の形相であり、型であり、構造である。言い換えれば出来事は、いろいろな程度において複合的な特徴をもつのである。ところで、出来事は一つの個別者であり、決して繰りかえされることのないものであるが、その型すなわち形相、すなわち永遠的客体は、無限数の出来事のうちに繰りかえし現われうる。「客体」はそれ故「永遠的」である。それはこの意味において「普遍者」（universal）である。

* これからの議論はとくに『過程と実在』一七二―五頁、四四三―八頁、にかかわりがある。

形而上学は観念の範疇的体系として、それ自身、もっとも広く、もっとも一般的に適用しうる永遠的客体の体系である。* 「究極者の範疇」（Categouy of the Ultimate）は、あらゆる形而上学的主張のうちのもっとも一般的なものである。この範疇は何が存在するかを決定するものであるから「普遍者の普遍者」（universal of universals）である。ところで存在するものは、一度しか現われることのない個別者、言い換えれば出来事である。それら出来事はまた、「具体化」や、「創造性」（creativity）や、「新たな結合の産出」（production of novel togetherness）によって、等しく特徴づけられる。そして形而上学のあらゆる原理は、ホワイトヘッドの言葉で言えば、「究極者」からの「抽象」

である。一つの形而上学的体系は、あらゆる現実的存在に適用しうるところの永遠的客体、すなわち、普遍者の体系である。またそれの「必然的」性格を強調して言えば形而上学的体系はあらゆる個別者が従わねばならぬ絶対的諸条件の集合である。

＊　一九三七年三月二十日（？）の講義。

究極的形而上学的概念をとり上げる場合、そういう概念はいたるところに現われうるのでなければならない……。形而上学の究極的原理は、歴史とは独立に適用される。それら原理は永遠的客体のもつ根本的な性格をもっている。……形而上学的必然性は、それがある時間点への関係を示さぬという意味において、永遠的客体に属する。

形而上学的一般条件の一つは各々の個別者が何らかの永遠的客体によって規定されなければならぬということである。この一般的な公式は、いかにも単純に見えるが、しかし、個別者を反襲可能な特徴によって規定するというこのことは、実は、複雑な事態なのである。すでに見たように、ホワイトヘッドは一つの現実的存在のうちに、外から受けた影響（所与）と、その現実的存在のもつ統合機能によって実現された統一形式とを、区別した。ところで、所与は永遠的客体（すなわち把握の諸形式）であり、また統合形式も、それが如何に複合的であってもやはり一つの永遠的客体である。それ故、永遠的客体は、一方では、或る現実的存在が他の多くの現実的存在からなる世界に対してもつ結合の形式として働き、他方では、個別者の「主体的形式」（subjective form）として働く。つまり、個別者の関係的特性（relational property）と性質的特性（qualitative property）のいずれもが、永遠的客体の働きなのである。

ホワイトヘッドは、この区別を言い表わすために、関係的形式としての役割りをもつ永遠的客体を「客体的種」（objective species）と呼び、主体的形式としての役割りをもつ永遠的客体を「主体的種」（subjective species）と呼んだ（『過程と実在』四四五頁）。前者は「関係的な機能のみをもつ」。そしてそのようなものとして、客体的種からなる一つの永遠的対象である。「それは主体的形式の確定性を構成することは決して出来ない」（『過程と実在』四四五―

六頁)。永遠的客体からなる「客体的種」は、世界が一つの主体に対して「与えられる」仕方を示している。「客体的種に属する永遠的客体は、プラトン的数学的形相である」(『過程と実在』四四六頁)。かくてホワイトヘッドは、客体的種を、出来事から出来事へエネルギーが伝播する場合の数学的形式である、と考える。それは「空間的諸関係」と諸々の「波長」とからなる客体的秩序である。*そして、そのようなものとして客体的種に属する永遠的客体は、或る主体の質的感受に対する単なる所与にすぎない。所与は何らかの把握主体を離れては、勿論存在しない。

* 『過程と実在』四九八頁。「これら数学的関係は、われわれの住むこの宇宙世代を特徴づけるところの、延長の体系的秩序に属する」(『過程と実在』四九八頁)。

さて、問題のもう一方の面は永遠的客体からなる「主体的種」である。これは性質的な「主体的な」経験の諸形式である。主体的種に属する永遠的客体は、「或る感動であり、またある強度であり、またある好みであり、またある嫌悪であり、ある快感であり、ある苦痛である」。(『過程と実在』四四六頁)。この意味の永遠的客体はまた、「赤」のような単純な感覚的感受であることが出来、また、たとえば「美的」経験の場合のように極めて複雑な構造をもつものであることも出来る。さて、永遠的客体からなる客観的種及び主観的種の両者は、同一の出来事のうちに作用する。前者は、個別的出来事に対して(それへの所与として)客体化せられたものとしての世界(客体的実在性 realitas objectiva)である。後者は、その客観化せられた世界への「反応」の形式である(『過程と実在』四四四頁)。

主体的客体のうちで感覚所与は「最低次のもの」である(『過程と実在』一七四頁)。人間経験の水準においては、感覚所与は、さまざまな色や音のような識別された感覚的相違によって示される。最低次のものとして、それらはさまざまな「型」の要素をなし、或る型に従った配列とは区別されうる。それらはいわゆる「感覚の最小単位」(minima sensibilia)*である。そしてこのような感覚所与は、比較的複雑な有機体に属するものであるけれども、ホワイトヘ

ッドは、主体的形式が自然のあらゆる出来事に宿っているという説に忠実に、感覚所与を「現実的生起のもっとも単純な段階のもの」にも帰すのである。**

* 『過程と実在』一八九頁、『科学と近代世界』二四〇頁参照。『たとえば緑の特定の色調のごとく、多くの構成要素の関係に分析出来ない永遠的客体は、「単純」と呼びうるであろう』。

** 『過程と実在』一七六頁、デューイもまた、さまざまな性質は、それが何であるかは知らないにせよ、自然のあらゆる出来事に帰せられねばならぬ、と主張する。しかし、デューイにとっては、あらゆる性質そのものは、独自なものであって普遍者や永遠的客体ではない。『経験と自然』二六九頁参照。

いかなる単純な永遠的客体も、いわば前後関係なしには、存在しない（すなわち、「時間的世界への侵入 ingression をもたない）。永遠的客体として、それはそれ自身の明確な同一性を有するが、それが一つの出来事の一特徴として現存する場合には、それの「関係的本質」により、他の多くの永遠的客体との或る型の関係のうちに立つ（『過程と実在』一七五頁）。かくて、一つの永遠的客体の「関係的本質」とは、或る個別的現実へその客体が侵入する場合の、その侵入の形式であり型である。そしてその形もまた一つの永遠的客体であって、そのうちにおいて、上の単純な永遠的客体は一つの「変項」(variable) となる。そして任意の永遠的客体が永遠的客体の国のうちでもつ無限な関係を背景としてみると、その永遠的客体が現実に生起する事例は、ありうべき事柄のうちからの高度の選択ないしは限定である。「主体」の内から見ると、諸々の永遠的客体（感覚所与とそれらのつくる型と）は経験の性質的内容の多少とも複合的なものを構成する。しかし、「外から」すなわち所与として、見ると、その同じ永遠的客体は、数学的プラトン的諸形相となるのである。*

* すなわち、主体的形式の継承（主体的形式の「客体的不死性）」は、数学的形式の姿をとり、エネルギーの諸量子となるが、次の出来事において、感覚せられると、ふたたび諸性質とそれらがつくる型、という姿になるのである。

一つ一つの現実的生起は、ある型に配列された感覚所与をもつことにより、みずからの見地からの永遠的客体の段階組織をもつことになる。一つの現実的存在として、一つの出来事は、その本性を確定するところの複合形式すなわち構造をもつのであるが、その出来事を特徴づける永遠的客体は、他のすべて永遠的客体との間に体系的抽象的諸関係をもつ。抽象的に見ると、最小限の複合性をもつところの一つの永遠的客体は、他の更に複合的な永遠的客体のつくるさまざまな型のうちに含まれる。そして、それらの型も更に一層複合的な型の要素となることが出来、以下同様にすすむ。そこでこのような段階組織の「基底」(base) を定めるならば、もろもろの永遠的客体は、その基底との関連において「等級づけられたもの」(graded) とみなされうる。そしてそのような基底はあらゆる現実的存在のうちに存する。そこで一つの現実的存在は、或る型に入れられた「単純な」永遠的諸対象をみずからのうちにもつことにより、みずからの見地からみた、永遠的諸対象の無限な段階組織をもつことになる。* それ故、一つの現実的存在はあり得べき事柄の極めて狭い選択を示している。その段階組織は現実化されるとき、制限された有限なものになる。しかし、この制限の諸条件は、ホワイトヘッドの形而上学の極めて困難な側面のいくつかへわれわれを導いて行くことになるのである。

＊　『科学と近代世界』二二〇―二四二頁
ホワイトヘッドは『科学と近代世界』における『抽象』の章を、『過程と実在』では前提して論じているように見える。『過程と実在』の二八七頁で特にその章を引き合いに出している。

次のように言うことはホワイトヘッドの念頭にある究極的形而上学的問題を後に押しやるにすぎないであろうが、すべての現実的存在の過去はそれの現在の状態に対して限定を課している、ということができるであろう。すでに実現され、いくつかの永遠的客体的「種」のうちに反映している諸形相は、現在に対する必然的条件であって、現在のうちにありうるところのものに限界を与えている。特に重要な点をとりあげると、空間的時間的秩序（それはいくつ

かの可能な秩序のうちの、一つの限定された秩序である）は、エネルギーが過去から現在へ伝えられる形式としての、すべてに通ずる複合的な永遠的客体である。空間的秩序は、過去・現在・未来のあらゆる現実的存在を支配する。プラトンに対する正しい解釈であるかどうかはともかくとして、ホワイトヘッドは次のように言っている。『現代の数学的自然学の空間時間は、その中で起こる出来事にあてはまる特殊な数学的公式から切り離して考えれば、殆んどそのままプラトンの考えた「受容者」としての空間である』（『観念の冒険』一五四頁 Mentor Books）。かくて、客体的種に含まれる永遠的客体は、空間時間的に分布しているエネルギーが過去から現在へと存続する*際の形相（数学的諸形式）である。それら永遠的客体は、事実の世界の確定した形式なのである。

* 「過去から現在へ存続する」と言った点は、「各々の現実的存在の中にそれ自身の展望の下に統一される」と言い換えてもよいであろう。

さて自己形成的な現実的存在もまた、それ自身の見地から見た、永遠的客体の無限な段階組織との関係において一つの限定の原理である。現実的存在がその主体的形式として実現するところのものと、純粋な可能性の領域との間には、一つの断絶がある。このような「突然の飛躍」(abruptness) は、現実的存在が、或る永遠的対象を受け容れつつ、それとは反対の他の永遠的対象の感受をこばむ、という「作用」の結果である。すくなくとも或る種の現実的存在にとっては、それの感受の感受形式、すなわち、それの実現すべき永遠的客体の主体的種は、いくつかの選択の可能性を許すものである。或る「基底」に対する永遠的客体の「等級づけられた」関連という、すでに述べた考えが暗示するであろうように、いくつかの選択可能性は、ある現実的存在の具体化の反応にとっては、「実在的な」可能性なのである。*選択可能な感受形式として何が重要であるかは、当の現実的存在の複合性の程度によって（言い換えればその心的極によって）部分的に決定される。この心的極という、「新しさ」の源は、自由ではあるが、しかし、その時かかわりのあるいくつかの可能性によって限界づけられてもいる。感受の一形式として受け容れられるということは、

抽象的可能性の無限な領域を背景として、現実的なものと可能的なものとの間の「切断」が成立することである。この切断は、形相の領域に関して、「存在と非存在」との差とホワイトヘッドが名づけるものを、決定するのである。

＊『過程と実在』一〇二頁、この主題は後に第八章において探究する。

一つの現実的存在の感受は、永遠的客体のつくる主体的種の形式の下で起こる。それら永遠的客体は、すでに見たように、多少とも複合的な或る型においてある、感覚所与である。客体的秩序において数学的諸形式であるものは、主体の側においては、或る性質的な型において経験される。空間と周期性についての主体的経験は、客体的秩序が主体の側に「受けとめられる」仕方の重要な一例である。＊かくて「数学的プラトン的形相」への鍵は経験のうちに存在するわけである。従ってまた、表象の直接態に含まれている数学的諸関係は、知覚された世界と知覚者のもつ諸性質とのいずれにも等しく所属するのである（『過程と実在』四九八頁）。

＊　一九三七年三月十七日の講義。「意識が最初にわれわれに告げるのは空間性である。次に告げるのは事物の歴史である。空間性と歴史とは経験の二つの側面である」。

永遠的客体からなる「客体的種」は「公的事実」（public matters of fact）を規定する。公的事実とは、すべての現実的存在の展望のうちに客体化せられた過去の世界である。それの共通の規定は、空間時間的連続とその形式的諸条件とである。それ以外の数学的形式、たとえばエネルギーの量子形式のごときも、公的事実の中でやはり普遍的に妥当しうるかも知れないけれどもまた他の特徴は、単に或る種の現実的存在（あるいはそれらからなる「社会」）に限って、過去の客観化の決定条件として、所属しうるであろう。実際ホワイトヘッドがしばしば指摘することであるが、エネルギーの伝播の数学的形式の非常に多くのもの、特に道徳的ならびに美的経験の公的世界に含まれる諸形式は、まだまったく知られていないのである。＊

＊　ホワイトヘッドは、科学のアリストテレス的分類的段階を数学的段階への準備的なものとのみ見做した。科学の求めるものは微分方程式なのである。但しこれは経験による解釈を必要とする。「赤は、一つの型における、すなわち、経験における、一つの構成要素である。けれども数学的公式は、そういう構成要素ではない」。一九三七年三月二十七日（？）の講義。

「公的事実」は、一々の現実的生起の具体化の統一の中に入ると「私的事実」(private matters of fact) となる。この変形は、ホワイトヘッドの形而上学において中心的、存在論的事実である。＊この変形においてこそ「新しさ」というものが出現するのである。そこで、現在の内容はそれが受けとられた時の形式とは違った形式を帯びた公的事実として、次に伝えられるのである。それ故、自然の過程は、その相次ぐ段階において累積的であって、過去の単なる繰り返しではない。

＊　『過程と実在』二二九頁。「創造的過程は律動的である。それは多くのものにかかわる公共性から、一つの個体のみに属する私事へと、揺れ動く。そして再び私的個体から客体化された個体の公共性へ戻る」。

然しながら、事実のうちに新しさを導入するという永遠的客体の役割は、命題についてのホワイトヘッドの説を離れては理解出来ないのである。今までのところわれわれは、最も基本的な存在論的状況とでも言うべきものを、主に示したのであった。最も基本的な状況とは、心的極が物的極に「順応する」場合である。こういう種類の現実的存在＊のもつ主体的形式は、物的極における永遠的客体に直接に対応するような永遠的な客体、からなる主体的種（たとえば或る型をなしている数個の感覚所与）、によって支配されている。

＊　『過程と実在』四四二頁。これはホワイトヘッドが「自然目的」(physical purpose) と呼ぶところのものである。この概念は後に吟味されるであろう。

現実的存在の更に高い複合、しかしまず必ずしも意識を含まぬ段階で、「命題」の感受が出現する（『過程と実在』三

九一頁)。感受された命題は、永遠的客体(純粋な可能性と見られた)と同じく、現実への侵入に関して不定性を示す。しかし、命題は永遠的客体と異なり、主体によって現実に感受せられた、或る一定の内容につながっている。心的極は「ありうべきもの」との対比における「あるところのもの」を感受する。「あるところのもの」は、可能ないくつかの述語(あるいは、述語の型)のための「論理的主語」(logical subject)として感受される(『過程と実在』三九五頁)。そして、このとき働く感受の力により、ある選ばれた述語(永遠的客体)は、当の現実的存在の歴史的径路を大いに変ずることが出来るのである。新たな永遠的客体が生成の流れに入りこむのは、命題の感受を通じてなのである。*

* 一九三七年三月二十七日(?)の講義。「永遠的客体のもつ偶然的側面は、可能性が心に抱かれるということである。すなわち、或る特定の公式の示す可能性が心に理解されることである。観念的な把握は、可能性が現実性の一構成要素として存在するさま、を示す。……私の主張する事は、あらゆる可能性が、どこかで観念的可能性として心に抱かれている、ということである。現実世界はこういう事実を許容しうるようなものとして記述されねばならぬ」。

かくてホワイトヘッドは、命題の感受をかれの存在論の中心的位置におくのである。命題の感受は、「純粋な自然目的」(pure physical purpose)と、狭義の知的感受との、中間段階である。命題の感受は「純粋な本能的直観」(pure instinctive intuition)の水準において出現するのである(『過程と実在』四二八頁)。　(未了)

(筆者　スタンフォード大学〔哲学〕教授)
(訳者　京都大学文学部〔哲学〕教授)

(追記　これは昭和三十九年度後期京都大学文学部において行なわれたゴヒン教授の講義の草稿である。)